

「電報を打ちました。」

「あゝ……お急ぎになるのですね。で何時お立ちですか？ 今日何時頃？」

「今夜の七時です。」

「あゝ！ 七時！ でお暇乞ひにいらしたのですね？」

「はあ、イリーナ・パウロウナ、お暇乞ひに参りました。」

イリーナは暫らく黙つてゐた。

「お禮を申し上げなくちやなりませんね、グリゴリー・ミハリツチ、此處においでになるのは大抵なことぢやなかつたでせう。」

「はあ、イリーナ・パウロウナ、難かしかつたです。」

「世の中は何でも大抵なことぢやありませんわ、グリゴリー・ミハリツチ、あなたは何うお考になりますか？」

「さうですとも、イリーナ・パウロウナ。」

イリーナはまた暫く黙つてゐた。何だか冥想してゐるらしかつた。

「でも親切にいらして下さつて有難うございました。妾はあなたが仰つしやつたやうに今直ぐ出来

るだけ早く結末をつけるやうに御決心なさいましたのを良いことだと思つてゐます……何うしてと申しますに、愚圖々々してゐますと……何うしてと申しますに……あなたが浮氣だと仰つしやつた妾でさへ、女優と仰つしやつた妾でさへ……たしかあなた左様仰つしやいましたわねえ？……」

イリーナは急いで立上つて他の椅子に腰掛け、卓子の端に兩腕をのせかけて、うつむいた。

「どうしてと申しますに、妾あなたを愛してゐますから……」と彼女は握つた指の間から呟いた。

リトウイノフは誰かに胸を打たれたやうによろめいた。今度はイリーナが顔を隠さうとするやうに力なく顔を素向けて卓子の上にのせた。

「えゝ、愛してゐます……愛してゐます……あなたも御存知ですわ。」

「私が？ 私がそれを知つてゐると仰つしやるのですか？」とリトウイノフが云つた。

「ね、お立ちにならなくちやならないことが最うお解りでせう。かうしてゐられないことが……あなたに取つても、妾に取つても、かうしてはゐられないのです。危険です、恐ろしいことです——左様なら！」彼女は椅子から屹と立上つて云つた、「左様なら！」

彼女は自分の居間の扉の方に二足三足歩いて行つて、後ろに手を差出してリトウイノフの手を探して握ろうとするやうに素早く動かした。けれどもリトウイノフは離れた處に、木の様に突立つてゐた

……彼女はまた、「左様なら、妾をお忘れになつて下さいまし、」と云つて振向きもせず妾を隠した。リトウイノフは一人に残されてもまだ我に歸ることが出来なかつた。暫くして氣が附いて女の居間の扉の傍に寄つてイリーナの名を一度、二度、三度呼んで見た……彼の手は早やハンドルに懸つて居た……其の時旅館の階段からよく響くラトミロフの聲が聞こえた。

リトウイノフは帽子を目深に冠つて階段に足を向けた。瀟洒たる風采をした將軍は瑞西生れの門番の部屋の前に立つて拙い獨逸語で明日一日貸馬車が雇ひ度いと掛合つてゐた。リトウイノフの姿を見るや否や、彼はまた帽子を不自然に高く持ち上げて、「今日は、」と云つたが、それには如何にも人を馬鹿にした様子があつた。けれどもリトウイノフはそんなことには氣が附かなかつた。彼はラトミロフへの會釋もそこ／＼に自分の宿の方に急いで、早や荷作りをしてある靴の前に立つた。彼の頭には渦が巻いて、心臓は豎琴の絲のやうに震動する。何うしたらいいのだらう？ また彼は斯うなることゝ覺悟してゐたのだらうか？

不思議な様でも彼は斯うなることゝ覺悟はしてゐたのだ。それは彼を雷の様に打ち、自分でも認める勇氣がない程だが、それでも彼は斯うなることゝ前から思つてゐたのだ。それに今では何が何やらさつぱり見分けがつかない。總てのものが混亂して自分の思索の絲を手探ることさへ出来ない。彼は

莫斯科の昔を思ひ出した。あの時も何んなに「それ」が突如として、嵐の様に襲來したかを思ひ出した。彼は息も出来ない遺瀾ない心細い恍惚に心を押しつけられてゐた。彼にはイリーナの口から出た言葉が本當に彼女の言葉でないことは何うしても思ふことが出来なかつたのだ……然しそれなら？と云つて彼の決心を顧すわけにも行かなかつた。彼の決心は相變らず動かなかつた。錨を卸した様にしつかりしてゐた。リトウイノフは自分の思索の絲を失してしまつた……さうだ。けれども彼は意志だけはまだ残つてゐて、何んだか彼は彼に縋つてゐる他の人の様な氣もした。彼は鈴を鳴らして給仕を呼び勘定書を持つて來ることゝ、夕方の乗合馬車に座を取つて置くことを頼んで、何うしても後歸りの出来ぬやうに自分でした。「この爲に後で己れが死ぬるやうなことがあつても？」と、まんじりともしなかつた昨夜と同じ様に云つた。彼はこの文句が非常に氣に入つてゐたのだ。「この爲に後で己が死ぬやうな事があつても！」とまた繰り返しながら部屋の中を彼方此方歩きまはつた時に思はず眼を閉じて息を止めた。その間にも始終イリーナの言葉は、彼の魂に喰ひ入つてパツと焔の様に燃え上つた。「お前は二度戀をしたのか、」と彼は自分で考へた、「他の生命が一つお前の處に遣つて來た。お前はそれを自分の内に入れてやつた——お前はその毒を永久に逃れることは出来ないのだ。お前はそれを永久に破ることは出来ないのだ。さうだ。だがそれは一體何だらう？ 幸福か？……そんなことが

あり得るだらうか？ お前があの女を愛してゐる、それは解つてゐる……けれども……あの女がお前を愛してゐるだらうか……」

然し此處まで来ると彼はまた思索を打ち切らなければならなかつた。暗い闇夜の旅人が道を踏み迷ふのを恐れてひたすらに向ふに輝く灯の光を見詰めて其れから一時も眼を放さぬと同じ様に、リトウイノフは自分の注意を絶えず唯一の點、唯一つの的に集中した。自分の許嫁の處に着くこと、最つと確かに云へば（彼は彼女の事は思ふまいとしてゐた）ハイデルベルヒの旅館の一室に着くこと、これが彼の目の前に嚴然と立つて彼を導く光であつた。後で何うなるだらう、そんな事は知りもしなければ、知り度くもなかつた……唯知つてゐることは決して、二度と歸つては來ないと云ふことだけだつた。「たとひ死ぬる様なことがあつても！」と十度も繰返して云つた。彼は時計を出して見た。

六時十五分だ！ まだ随分待たなきやならぬ！ 彼はまた部屋の内を彼方此方歩き廻つた。夕日は今や沈まうとして、木立の上の大空を眞紅に染め、其のほんのり明るい餘光を薄暗い部屋の窓に投げかけてゐる。ふとりトウイノフは後ろで扉が開いて直ぐまた靜かに締まる氣合を感じた……彼が振返つてみると扉の傍に眞つ黒い外套に包まれて一人の女が佇んでゐる……

「イリーナ、」と叫びながら彼は餘りの驚愕に自分と自分の手を握りしめた……女は顔を上げて男の胸に縋りついた。

二時間の後には彼は自分の部屋の長椅子に腰かけてゐた。蓋を開けて空になつた荷物は部屋の隅に轉んでゐて、亂雑に取りだされた眞ん中の卓子の上には、今しがた彼が受取つたタチアーナの手紙が置いてあつた。彼女の手紙には伯母の病氣がすっかり全快したから、直ぐドレスデンを立つと云ふこと、若し差支が起らなかつたら翌日の十二時に二人ともパーデンに着くから停車場まで迎ひに来てくれと云ふことなどが書いてあつた。二人の爲の部屋はリトウイノフに依つて彼と同じ旅館に早や取つてあつた。

其夜彼はイリーナに手紙を送り、翌朝その返事を受取つた、それには斯う書いてあつた。「遅かれ早やかれ斯うなることと思つて居ました。妾は昨日申し上げた通りをまた申し上げます、妾の生命はあなたのものですから、何うとでもなさつて下さいませ。妾はあなたの自由を束縛したくはありませんが、若しお望でしたら何もかも打棄て、世界の果てまでもあなたに連いて行きます。申すまでもなく明日また逢ひませう。——あなたのイリーナより。」

最後の二字は思ひ切つて大きく大膽に書いてあつた。

八月十八日の正午に停車場のプラットホームに集まつた人の中にはリトウイノフも交つてゐた。彼は先ほどイリーナを見た。彼女は無蓋の馬車に乗つて良夫と最一人年を取つた紳士と一緒に立つた。彼女の方でもリトウイノフに眼を呉れたが、彼は何だか曖昧な情緒が彼女の顔に閃めくのを認めた。けれども彼女は直ぐ日傘で自分の顔を隠してしまつた。

昨日から昨日から不思議な變化が彼の上に起つた——彼の全體の様子にも、動作にも、顔の表情にも變化が起つて自分でも違つた人になつた様な氣がした。自信も心の平和も消えてしまつた。自分に對する尊敬の念も、昔の精神的な考へも無くなつてしまつた。總てのもが最近の消し難い印象のために打消されてしまつて、或る強い、甘い、——そして質の悪い、今まで味はつたことのない感じが目覺めてゐた。或る神秘的な客が心の奥の殿堂に這入つて來て、新しい家の持主の様に沈黙したまゝ、莊嚴に其の中に横たはつた様な氣もした。最早やリトウイノフは恥じはしない。恐怖を感じるだけだつた。同時に彼は堪らない苦しさに襲はれた。捕虜になつた人や負けた人は此の複雑な壓迫の感じを知つてゐるだらう。盗人が初めて物を盗んだ時にも、これと同じ様な感じを味はうであらう。リトウ

イノフは打負かされたのだ。不意に打負かされたのだ……して彼の正直な心は何うなつたであらう？

汽車は二三分遅れた。リトウイノフの心配は身を焦がす様な懊惱になつた。彼は一處に凝としてゐられないで群集の中を彼方に行つたり此方に來たりした。「最う二十四時間を延ばしてくれるなら」と彼は思つた。……初めてタチアーナを見ること、初めてタチアーナを見ること……彼にはこれが怖ろしくして堪らなかつた……彼にはこれが今直ぐ遣つて來るのだ……そしてこの後も！ この後も……何精ふものか！……最う彼は決心もしなかつた。最う自分で自分の問ひに答へることも出來なかつた。昨日自分で云つた言葉が時々痛い頭を掠めた……彼はかうしてタチアーナに逢はうとしてゐる……

聽て長い汽笛が聞こえたかと思ふと轟々たる響を立て、汽車が靜かに線路を曲つて滑り込んだ。人々は急いで其の方に駆け込んだ。リトウイノフも、一緒に宣告を受けた人の様に足を曳づつた。いろいろの顔や帽子が客車から現れた。とある窓から白いハンケチがきらめいた……カピトリナ・マルコウナが彼に合圖をしてゐるのだ……最うお終ひだ。彼女はリトウイノフを見つけ、彼も彼女を認めた。汽車は凝と止まつた。リトウイノフは汽車の扉に走り寄つてそれを開けた。タチアーナは伯母の傍に立つて欣然と頓笑みながら手を差し伸べた。

彼は二人を助けて、降ろして遣り、短かい言葉で纏りのない挨拶もそこ／＼に大急ぎで二人の切符

や、旅行鞆や、包みを取つて、赤帽を呼びに走つたり馬車をん呼だりした。周囲は人の群で混雑してゐた。彼は人の群とその混雑と矢筈しさを却つて喜んだ。タチアーナは少し隅に寄つてまだにこゝろ頬笑みながら、急がしさうに奔走する彼を静かに待つてゐた。カピトリーナ・マルコウナは凝としてゐられなかつた。まだ自分がバーデンに着いたことが信じられないのだ。

伯母は唐突に叫んだ「傘は？ タチアーナ、傘は何うして？」二本の傘を自分の小脇にかゝへてゐることには些つとも氣が附かないのだ。それから伯母はハイデルベルヒからバーデンまで一緒に乗り合はした途連れの女に大きい聲で長々と暇をつげた。この女こそ馴染のスハンチコフ夫人に他ならぬので、彼女はグバリヨーフに逢ひにハイテルベルヒまで行つていろ／＼な「教訓」を受けて歸るところであつた。カピトリーナ・マルコウナは妙な縁を取つた外套を着て、菌形の圓い旅行帽を冠つた下からふさ／＼した短かい白髪を見せてゐる。背の低い瘦せたこの老婦人は旅行の爲にやゝ顔を赧くして鋭い突き立つやうな聲で、頻りに露西亞語を饒舌つてゐた……彼女はすぐ、人々の注意的となつた。

聽てリトウイノフは彼女とタチアーナを馬車に乗せて自分もそれに向合つて座つた。馬が走りだした。それからいろ／＼なことを問ふたり問はれたり、あらためてまた握手したり、微笑や挨拶を交し

たり……これでリトウイノフも、ほつとした。最初の瞬間は先づこれで満足に過ぎてくれたわけだ。タチアーナは彼の何處にも、變つたところを認めず當惑してはゐなかつたらしい。彼女は安心して、あどけなく微笑したり、可愛らしく顔を赧らめたり、人の好さ／＼な笑ひを漏らしたりしてゐた。彼は今までは見ようとしても何うしても眼が云ふことを聞かなかつたが、此の時窃と盗むやうにはなく、まともに凝と彼女を見た。彼の心臓が烈しく動悸が打つた。正直な、あどけない女の何の屈託もない顔は彼の心を聳々と責めさいなんだ。彼は思つた「とう／＼來たのだね、可愛さうな女よ、長い／＼間私が待ち焦れてゐたお前、私が生涯一緒に暮らさうと思つてゐたお前は、私を信じてゐる……だのに……だのに……私は……」リトウイノフの心は沈んだ。けれどもカピトリーナ・マルコウナは彼に冥想の時間は與へないで頻りに質問の矢を浴せかけた。

「あの柱の建物はなあに？ 賭博をする處は何處にあるの？ 向ふから來るあの人は誰？ タチアーナ、タチアーナ、まああの下袴を御覽よ！ まああれは誰なんだらう？ あの人は巴里から此處に來た人だよ。おや！ あの帽子！ 此處では巴里で買へるものは大抵買へますか？ ですけど随分高いでせうねえ？ さう／＼妾それは立派な賢い夫人と知合ひになつたのですよ！ あなたも知つてゐるでせう、グリゴリー・ミハリツチ、その人が或る是れもまた大變賢い露西亞人の家であなたに逢つ

たことがあると云つてゐましたよ。その人が妾方に訪ねて来る約束をしたのですが、まあどんなに貴族社會を悪く云つてゐたでせう——本當に偉い人でした！あの灰色の口髭の人は何ですか？プロシヤの王様？ タチアーナ、タチアーナ、御覽、あれがプロシヤの王様であつて。左様ぢやないの？プロシヤの王様ぢやなくて和蘭の大使なんですか？ えッ？ どうも車の音がしてさつぱり聞こえないのですよ。あゝ、綺麗な並木なこと！」

「本當に綺麗ですわねえ、伯母さん、」タチアーナも相槌を打つて、「そしてまあ何處も何處も青々としてよく晴れてゐますこと！ ねえ、グリゴリー・ミハリツチ？」

「はあ、よく晴れてゐます、……と彼も小さい聲で答へた。

聽て馬車が旅館の前に止まつた。リトウイノフは一人をかねて取つて置いた部屋に案内して、一時間ばかりしてまた來ると約束して自分の部屋に歸つた。自分の部屋に歸ると同時にまた一時鎮まつてゐた元の心の状態に戻つて來た。室内には昨夜以來イリーナが最上の支配をしてゐて、總てのものが斷えずイリーナを語り、空氣までが窺かにイリーナの跡を止めてゐるやうな氣がした……リトウイノフはまた彼女の奴隷になつてしまつた。彼は胸に隠してゐた彼女のハンケチを取出して自分の唇に押當てた。燃える様な追憶が微妙な毒の如く血管を走るのを感じた。彼は最う後返りもなければ撰擇もな

いと思つた。タチアーナに對して抱いてゐた氣の毒と云ふ感じは火に當つた雪のやうに消え、何の悔恨も感じなかつた。……彼の不安も柔らげられ、自分の心で考へてみて偽善ではないかと怪しまれることも最早や氣がとがめなくなつた……愛、イリーナの愛、これが今の彼の眞理でもあり、絆でもあり、良心でもあつた……感じの強いリトウイノフは自分の今の境遇の怖ろしさには無感覺で、何うしてこの境遇から逃れるかといふことなどは少しも考へないでまるで他人の事のやうに濟ましてゐた。

約束の時間が來ない中に給仕が來てリトウイノフに今度來た二人の婦人が待合室で待つてゐるから來てくれるやうにと告げた。給仕に導かれて行つてみると彼等は最早や着物を着替へて帽子まで冠つてゐる。彼等は天氣も好いからこれから直ぐにもバーデンの見物に出かけようと云ひ、特にカピトリナ・マルコウナは待ち切れぬほど焦々してゐた。彼女は人々が流行の衣裳を着飾つて對話館の前を散歩する時刻にはまだ早や過ぎると聞いていさゝか失望した。リトウイノフは彼女の腕を取り、型の様に一應見物させることにした。タチアーナは其の傍について歩きながら靜かな興味を持つて伯母を眺めてゐた。カピトリナ・マルコウナは相變らずいろ／＼なことを尋ねつけよた。ルーレットや、他處で逢つたら彼女が大臣とでも思ひさうな立派な人々や、素早く動く匙や、緑の布の上に積かさねた金や銀の山や、賭博をする老婆や、お白粉を塗りたくつた巴里の女や、こんなものを見たカピトリ

「ナ・マルコウナは気が遠くなつてしまつて、道徳的な憤慨を起すことなどは全く忘れ果て、たゞ目を見張つて眺めながら見る物ごとに驚きの叫びを上げるのみだつた。ルーレットの底の象牙の玉の鋭い音は彼女の骨髓まで響いて、其處を後ろに立去つて外に出た時はじめてほつと溜息をつきながら、元の元氣になつて頻りに貴族社會の投機的遊戯を非難しはじめた。リトウイノフは唇に静かな不快な微笑を浮かべた。彼は退儀さうに、五月蠅さうに素氣ない返事ばかりした：「けれども彼はタチアーナに向直つた時には窃かに當惑を感じた。彼女は此の人から受けた印象は何んなだらうといふかるやうな眼付で注意深く彼を見入つてゐた。彼が彼女に對してうなづけば女も同じ様にうなづいてまたじろ／＼と彼に見入つた。さながら彼がすつと遠方にでもゐるやうに氣を張りつめて見入つてゐた。リトウイノフは二人を案内して對話館を出て、早や二人の露西亞の婦人が其の下に腰かけてゐる「露西亞の木」の傍を抜けてリヒテンターレルの通りの方に行つた。通りに出るか出ないかに早や向ふから遣つて来るイリーナの姿を彼は認めた。

彼女は良夫とバツীগンと一緒にこちらに歩いて来る。リトウイノフは紙の様に白くなつたが、足並はゆるめないで、彼女に近づくと黙つたまゝお辭儀をした。彼女も叮嚀に、が冷たくお辭儀をして窃とタチアーナに眼を呉れたまゝ通り過ぎた。……ラトミロフは帽子を高く上げ、バツীগンは何やら云つたやうだつた。

「あの女の人是谁ですか？」と唐突にタチアーナが訊ねた。この時まで彼女は滅多に口を利かなかつた。

「あの女の人？ あれはラトミロフ夫人です。」

「露西亞の方ですか？」

「はあ。」

「此處でお知合ひになりなすつたの？」

「いゝえ、すつと前から知つてゐます。」

「綺麗な方ですこと！」

「お前あの人の着物を見たかへ？」とカピトリナ・マルコウナが口を入れた。「あの人のレースだけでも十軒の家の人が一年間暮せるよ。一緒にゐた人があの人の良夫なんですか？」とリトウイノフに向いて訊ねた。

「はあ。」

「随分金持なんでせうねえ？」

「さあ何うですか、左様でもないでせう。」

「あの人の位は？」

「將軍です。」

「あの女の方の眼は何うでした！」とタチアーナが云つた。「沈んだやうな、見貫くやうな、不思議な眼付でしたわ……あんな眼は妾見たことがない。」

リトウイノフは何とも答へなかつた。彼はまたタチアーナの何か求め探すやうな目差しを受けてゐるやうに感じたが、それは彼の思ひ違ひで、彼女は路に敷きつめた沙を踏む自分の足先を見詰めてゐたのである。

「おや……まああの變な人は誰でせう？」と不意にカピトリナ・マルコウナが呼んで低い軽い馬車の中に贅澤な着物に薄紫の靴下を穿いて無作法に横になつてゐる赤ら髪に團子鼻をした女を指示した。

「あの變な人！　なあに、あれは有名なコラ嬢ですよ。」

「誰？」

「コラ嬢です……巴里の……有名な人です。」

「えッ？　あのお轉婆が？　まあ恐ろしい人！」

「だつて構やしないでせう。」

カピトリナ・マルコウナはたゞ吃驚して手を上げただけだつた。

「まあ此のバーデンと云ふ處は！」と彼女はとう／＼云つた。「此處に腰掛けてもいゝでせうか？　妾少し草臥れました。」

「いゝですとも、カピトリナ・マルコウナ……掛ける爲にあるのですから。」

「さう、知らなかつた！　巴里にも路傍に腰掛けがあるさうですか、こんな處に掛けるのはあまりいゝものぢやありませんぬ。」

リトウイノフは返事をしなかつた。此の時になつて初めて彼は其處から僅か二歩ばかりの處で萬事を決定するイリーナとの打明話をしたことに氣が附いた。それから今日逢つた時に彼女の頬の赤い點が目についたことなど思ひ出した……

カピトリナ・マルコウナは深く身を沈めるやうに腰を卸し、タチアーナもその傍に腰かけた。リトウイノフは一人路に立つてゐた。彼の心持ちだけだつたかも知れないが、彼とタチアーナの間次第に知らず知らず何事か起りつゝあるやうに思はれた。

「あゝ、あの人はほんとに氣の毒な人だ！」とカピトリーナ・マルコウナは憐れむやうに頭を振つて云つた。「あの人の持物で十軒どころぢやない、百軒の家族が養へる。お前あの帽子の下の赤い髪にダイヤモンドが着いてゐたのを見たかい？　ありや屹度本當のダイヤモンドだよ？」

「あの人の髪は赤くはないのです。」とリトウイノフが云つた。「赤く染めてあるのです——あれが流行なんですから。」

カピトリーナ・マルコウナはまた手を上げた。驚いて言も云へなかつた。

「さうですかねえ、」と暫くして彼女が云つた。「私たちがゐたドレスデンでは萬事がまだこんなに極端に贅澤ぢやありませんよ。此處よりか少し巴里に遠いからなんでせうね。左様思ひませんか、グリヨリー・ミハリツチ、え？」

「私が左様思はないかと仰つしやるのですか？」とリトウイノフが云つた。彼は、「一體この人は何を話してゐるのだらう？」と思つた。「私？　そりや私が……そりや……」

丁度この時靜かな足音がしてパツキーギンが現れた。

「お早やう、グリヨリー・ミハリツチ、」と彼はにこ／＼しながらうなづいた。

リトウイノフは直ぐ彼の手を握つて、

「お早やう、お早やう、ソゾント・イワニツチ。先つき君と出會ひましたわね……先つき並木路で？」

「えゝ、あれが私だつたのです。」

パツキーギンは腰かけてゐる二人の婦人に叮嚀な會釋をした。

「君に紹介しましょう、ソゾント・イワニツチ。私の昔馴染で親族で今バーデンに着いた人です。私たちの同國人で矢張りこのバーデンに逗留してゐるソゾント・イワニツチ・パツキーギンです。」

二人の女はちよつと腰を淨かした。パツキーギンは改めてまたお辭儀をした。

「これは妙な處でお目に掛ります、」とカピトリーナ・マルコウナは、しとやかな聲で云つた。この親切な老婦人はすぐびく／＼する方なのだが何よりも自分の威權を保つことに氣を附けてゐた。「皆様がこのバーデンに逗留するのを愉快な役目にしてゐらつしやるのですね。」

「バーデンは確かにいゝ處です」と云つてパツキーギンは横目でタチアーナを見た。「本當にいゝ處です。」
「本當にねえ、ですけど妾が見た處では、餘り貴族的だと思ひます。私たちはこれまですつとドレスデンにゐたのですが……随分あすこは面白い處でした。けれども此處はあんまり騒々しくてね。」

パツキーギンは「この人はこんなことを云ふのが好きなのだな」と思つたが口に出しては、「その點は全く御觀察の通りです。然し景色は非常によくて、また位置も珍らしいほどいゝのです。お連れのお方

は乾度さうお思つてゐらつしやるでせう。さうでせう、奥様？」かう云つて彼は今度は直接にタチアーナに振向いた。

タチアーナは大きい、はつきりした眼を上げて、パツギーンを見た。彼女は當惑してゐるらしかつた。何用があつて、また何うしてリトウイノフは到着早々から、こんな見知らぬ人に紹介したのだらう、尤もこの人は親切らしい惻巧さうな顔をして、打解けた優しい眼で見てゐるけれど。

「はあ、」と暫くして彼女が云つた、「いゝ處でございますね。」

「此處の古城には是非行つて御覽なさい、」とパツギーンは言葉を續けた、「殊に何うしても行かなさうやならぬ處は——」

「サクソンのスイス——」とカピトリリーナ・マルコウナが云ひかけた。

此の時並木路から喇叭の音が響いて來た。それはラストトから來たプロシヤの軍樂隊が（千八百六十二年にはラストトにまだ聯邦の城塞があつた）音樂堂で一週間毎の合奏をやりはじめたのである。カピトリリーナ・マルコウナはやをら身を起して、

「音樂だ！ 對話館の音樂だ！……行つてみませう。最う四時頃でせう……ねえ？ 最う流行界の人たちが彼處に集つてゐるでせうか？」

「はあ、」とパツギーンが答へた、「今が一番賑やかな時で、音樂もいゝです。」

「ぢやこれから直ぐ参りませう。タチアーナ、おいで。」

「私もお伴をしてもいゝですか？」とパツギーンが訊ねてリトウイノフを驚かした。リトウイノフはイリーナがパツギーンを寄越したのだとは少しも思はなかつた。

カピトリリーナ・マルコウナは作り笑ひをして、

「結構ですとも、あの……お名前は——」

「パツギーンです、」かう云つてパツギーンは老婦人の腕を取つた。

リトウイノフはタチアーナの腕を取つた。二組の男女は對話館の方に足を向けた。

パツギーンは相變らずカピトリリーナ・マルコウナと話を續けたが、リトウイノフは、一口も利かないで歩いた。けれども二度ばかり彼は何故ともなく微笑して幽かにタチアーナの腕を自分の腕に押つけた。けれどもこの動作には虚偽があつた。彼女の方でそれに答へもしなければ、また彼自身もその虚偽なることを意識してゐた。一緒に近づけられた二つの心は互ひに打解けることをしなかつた。何故だか彼にも解らないが二人は一時的に何かの代理を勤めてゐるやうな氣がした。二人の間に起こりかけた言葉にも表はせない或るものは次第に力強くなつて來た。タチアーナはまた注意深く凝と彼を見

カピトリリーナ・マルコウナは作り笑ひをして、
「結構ですとも、あの……お名前は——」
「パツギーンです、」
リトウイノフはタチアーナの腕を取つた。
パツギーンは相變らずカピトリリーナ・マルコウナと話を續けたが、
リトウイノフは、一口も利かないで歩いた。
けれども二度ばかり彼は何故ともなく微笑して幽かにタチアーナの腕を自分の腕に押つけた。
けれどもこの動作には虚偽があつた。
彼女の方でそれに答へもしなければ、また彼自身もその虚偽なることを意識してゐた。
一緒に近づけられた二つの心は互ひに打解けることをしなかつた。
何故だか彼にも解らないが二人は一時的に何かの代理を勤めてゐるやうな氣がした。
二人の間に起こりかけた言葉にも表はせない或るものは次第に力強くなつて來た。
タチアーナはまた注意深く凝と彼を見

た。

四人の者が對話館の前の小卓子を圍んで座つた後もやはり同じ事だつた、ただ違ふのは騒がしい群集の物音に混つて、音楽の氣魂しい響が聞こえること、リトウイノフの沈黙が一層目立つてきたことだけである。カピトリリーナ・コルコウナはすつかり興奮してしまつた。パツীগンは、矢つぎばやの彼女の質問に答へて彼女の好奇心を満足させることは出来なかつた。けれども其の時有難いことには、ざわめく群集の中から不意にスハンチコフ夫人の瘦せた姿と飛び出しさうな眼が現れた。カピトリリーナ・マルコウナは、直ちに彼女を見つけて自分の卓子に招き、自分の傍に座らして、それから言葉を暴風の様に遣り取りした。

パツীগンはタチアーナの方に向き直つて優しい顔附で彼女の方にやゝ顔をうつむけながら柔らかい低い聲で話を始め、彼女は易々と自由にそれに答へが出来たので、彼女自身でも驚いたほどだつた。彼女はこの見知らぬ他人と話をするのを喜んだ。リトウイノフは前と同じやうに口元に固い不快な微笑を浮べたまゝ黙つてゐた。

やがて晚餐の時刻が來た。音楽は止んで群集も散りはじめた。カピトリリーナ・マルコウナは非常に温い言葉を交はしながらスハンチコフ夫人と別れた。彼女はこのスハンチコフ夫人を心から尊敬して

しまつた。尤も後では自分の姪にかう云つた、「あの人は餘り酷すぎるが何んな事でも、何んな人でも知つてゐる。妾たちも結婚式が濟み次第裁縫機械を買はなくちやならない。」パツীগンは彼等に暇を告げた。リトウイノフは二人を伴れて歸つた。旅館に這入りかけた時彼は手紙を渡された。わきに寄つて急いで封を切つて見ると、小さい皮紙の片れに鉛筆でかう走り書きしてあつた。「ちよつとでいゝのですから今夜七時に來て下さい、お願いいたします。——イリーナ。」リトウイノフは手紙をポケットに挿し込んで向直つてまた微笑を浮かべた……誰に？ 何故？ タチアーナは彼に背を向けて佇んでゐた。三人は旅館の食堂で食事をした。リトウイノフは、カピトリリーナ・マルコウナとタチアーナの間に挟まれて座つてゐたが彼は急に妙に調子づいて來て、頻りに世間話を始めたり、自分にも葡萄酒を注いだり二人にも注いで遣つたりした。彼が餘り自由に如才なく振舞つたので、前に座つてナポレオン三世式の鬚を生やしたストラスブルヒから來た佛蘭西の歩兵士官も、つい釣り込まれて話を仕かけ、別れる時には莫斯科の美人の爲に祝杯を上げたほどであつた。食事が濟むとリトウイノフは二人を其の部屋に送つて暫らく眉を擧めながら窓際に立つてゐたが、急に用事があるからちよつと出て來なくちやならないが晩には間違ひなく歸ると告げた。タチアーナは何も云はずに、さつと顔を蒼くして眼を落した。カピトリリーナ・マルコウナは、食事の後は何時も暫らく眠る習慣なのだが、タチアーナ

はこの習慣をリトウイノフがよく心得てゐることを知つてゐた。そして彼女は到着以來二人きりになつたこともなければ胸を開いて話したこともないから、リトウイノフがこの好機會を利用して二人きりになつて呉れるかと心待ちにしてゐたのであつた。だのに彼はこれから出かけやうとする！ 彼女は何うしたらいいのだらう？　そしてまた彼の全體の様子……

リトウイノフは返事を待たないで急いで出てしまつた。カピトリナ・マルコウナは長椅子に横になつて一二度大息をしたり唸つたりしたと思ふと間もなく靜かにすやくと眠りだした。タチアーナは部屋の片隅に退いて両手をしつかり胸に組合せて低い椅子に腰を卸した。

十九

リトウイノフが歐羅巴旅館の階段を踏み鳴らして大急ぎで上ると、彼を待受けてゐたらしいカルマツ種の狡猾げな小さい顔をした十三ぐらいの小娘が彼を呼び止めて露西亞語で云つた、「どうぞ此方に、イリーナ・パウロウナは直ぐ見えますから。」彼が、感げに娘の顔を見ると娘は微笑を浮べて、「さあどうぞ、さあどうぞ、」とうながしながらイリーナの寢室と向ひ合つた小さい部屋の旅行鞆や荷物の聲山置いてある處に案内して、窃と靜かに扉を締めたかと思ふと直ぐ姿を隠した。リトウイノフがま

だ部屋の様子を見廻さない中に素早く扉があいて、彼の前に淡紅色の夜會服に髪や頭に眞球をちりばめたイリーナが現れた。彼女は飛びつくやうに走り寄つて彼の両手をしかと握り締め、暫らくは言も云へなかつた。女の眼は輝き、胸はさながら高い處にでも登つたやうに波打つてゐた。

「あすこでは……お目にかゝれないものですから、」と彼女は口早やに囁いた、「今夜會に出掛ける處なんです。でも其の前是非あなたにお目に掛り度かつたものですから……あれがあなたの許嫁の方なんです。今日出逢つたのが？」

「はあ、あれが私の許嫁だつたのです、」とリトウイノフは「だつたのです」に力を入れて答へた。

「それでちよつとお目に掛つて申上げようと思つたのですが、何卒あなたは自分の身を自由にお考へになつて、昨日あつたことの爲にあなたの仕様と思つてゐらしたことを束縛されないやうにして下さ……」

「イリーナ！　何うしてそんなことを仰つしやるのです？」と大きい聲で訊ねた彼の言葉には限りない熱情が籠つてゐた。イリーナは思はずちよつと眼をつぶつた。

「おゝ、可愛いあなた！」と彼女は一層聲をひそめて情を籠めて云つた、「妾が何んなにあなたを愛してゐるかあなたにはお解りにならないのでせう。けれども昨日はたゞあなたの借りを拂つただけなの

です。昔の償ひをしたゞけなんです……あゝ！ 妾の若さは残念ながらお返しすることが出来ませんでした。でもその爲何の義務もあなたに負はせませんし、何んな約束をして頂かうとも思ひませんわ！ あなたの思ふ様になさつて下さい。あなたは空氣の様に自由で、何の束縛もないのですからね。解つて下さい、解つて下さい！」

「だつて私は最うあなたなしには生きて行かれないのですもの、イリーナ、」とリトウイノフは今度は小聲になつて遮つた。「私は昨日から何時までもあなたのもになつたのです……私はあなたの足元でなければ息が出来ないので……」

彼は女の手を接吻するためにおろ／＼顫ひながら身を屈めた。イリーナは彼の屈めた頭を見入りながら、

「ぢや妾も云ひますが、妾も何んなことがあらうとも、誰の事も何の事も考へないつもりです。妾もあなたのお定めになつたやうに、するつもりです。妾も永久にあなたのものです……あなたのものです。」

荒々しく誰かゞ扉を叩く音がした。イリーナは身を屈めて、「あなたのものです……左様なら！」と囁いた。リトウイノフは自分の頭の髪に女の唇が觸れるのを感じた。彼が身を起こした時には早や女

の姿は見えないで、廊下に衣擦れの音がして遠くから「*Je bien ? vous ne venez pas ?*」と云ふラトミロフの聲が聞こえた。

リトウイノフは高い箱の上に腰かけて顔も隠した。生々した微妙な女の匂ひが彼の身のまはりに纏ひ附いてゐた……イリーナが彼の手を握つたからだ。彼は「あんまりだ、あんまりだ、」と思つた。やがて先つきの小娘が部屋に這入つて来て彼の烈しい眼にまた微笑で答へながら、

「どうぞこちらへ——」と云つた。

彼の身を起こして旅館から出た。旅館は出たが自分の宿に歸る氣にはなれなかつた。彼は何よりも先づ心を鎮めなければならなかつた。彼の心臓は重く不規則に動悸打つて、大地が足の下にぐらつくやうに思はれた。リトウイノフはまたリヒテンターレルの通りに出た。彼は愈々決定的の瞬間が來たと思つた。まぎらしたりごまかしたりして愚圖々々しないでタチアーナに打明けなければならぬ時が來たと思つた。彼の眼には身動きもせず腰掛けたまゝ、彼の歸りを待つてゐる女の姿があり／＼と見え……彼には女に何と云つていゝかは解つたが、何んなにふるまつていゝのか、何んなに話の緒口を出していゝのかは解らなかつた。彼は正しい立派な、整然とした自分の未來に背を向けて、今や驀地に深い淵に突進してゐるやうな氣がした……けれども彼はこれは困惑しなかつた。事件は濟んだの

だが其の審判を何うして受けよう？　そして若し其の審判に炎の剣を手にした天使が来たら何うしよう。罪を持つ心には其の方が耐え易いかもしれない。……でなければ彼は自分で自分に短刀を突込む……恥かしいこと！　では他を棄て、自分に與へられた自由を利用するか……否、それよりか死んだ方がまだ増しだ！　彼にそんな卑しい自由が何うして持てよう……それよりも塵の様に自分を低くしてあの眼に愛を以つて見下される……

「グリゴリー・ミハリツチ、」と陰氣な聲が呼んで重い手が彼の肩に掛つた。

彼が吃驚して振向くとパツギンであつた。

「御覽下さい、グリゴリー・ミハリツチ、」とパツギンは例の謙遜した調子、「お邪魔かも知れませんが、遠方から見ます……と若し御氣分が悪いのぢやないかと思ひまして……」

「いゝえ邪魔どころか却つて都合がいゝのです、」とリトウイノフは小聲で答へた。
パツギンは彼と並んで歩きだした。

「いゝ夕暮ですねえ！　暖くつて長くお歩きですか？」とパツギンが云つた。

「いゝえ、」

「何うしてこんなことを訊ねたかしら、私は今あなたが歐羅巴旅館から出るのを見たのです。」

「ぢや私の後を追つてゐらしたのですか？」

「はあ。」

「何か御用事でもおありのですか？」

「はあ、」とパツギンは聞きとれないほどの聲で返事をした。

リトウイノフは立止まつて此の思ひがけない友を見た。彼の顔は蒼白く、眼は断えずじろく動き、整めた顔には長い間の悲哀の蔭が籠つてゐるやうだつた。

「何んな御用事のですか？」と靜かに云つてリトウイノフは身を寄せた。

「あゝ、宜しふございます……今。若しお差支へがなかつたら此處に腰を掛けたら何うでせう。丁度いゝ處ですから。」

リトウイノフは彼と共に腰かけながら、「何だか變ですねえ。君は何だか餘程心配してゐらつしやるやうですね、ソソント・イワニツチ。」

「いえ、私は何でもないのです。變でもないのです。私はたゞ君に……君の許嫁の人から受けた印象をお話したいのです……あの人が許嫁の人でせう……兎に角今日君が紹介して下さつた人のことです。私は云ひますが、私はこれまであんな可愛らしい人を見たことはありませんよ。黄金の様な心を

持った人です。天使の様な心を持った人です。」

これだけの言葉をパツীগンは同じ様な苦い悲しさうな物越しで話したので、リトウイノフは彼の顔附と言葉の不調和を認めない譯には行かなかつた。

「君のタチアーナ・ペトロウナに對する見方には過りがないですよ。けれども驚きましたね、私とあの女の關係を知つてゐらつしやつたり、あの女の性質を直ぐ知られたりするのですもの。あの女は本當に天使の様な心を持つてゐます。然し君は今斯んなことを話さうと思つてゐたのですか？」

「あの人が何んな人かは直ぐ見たゞけで解ります。」と彼の最後の質問を逃がれやうとする様に口早やにパツীগンが云つた。「あの眼をちよつと見さへすればいゝのです。あの人は地上のあらゆる幸福を受けるに足る人で、あの人に其の幸福を與へ得る男は羨むべき人です。誰だつて其んな運命を持った人になり度く思ふでせう。」

リトウイノフは稍々眉をひそめて、

「御免下さいよ、ソゾント・イワニツチ、然し何だか私にはお話が妙に思はれるのですが、……失禮ですがお言葉の中に含まれてゐる暗示は私のことなんですか？」

パツীগンは直ぐにはリトウイノフの言葉に答へなかつた。彼は頻りに藻掻いてゐるらしかつた。

「グリゴリー・ミハリツチ、私の云ふことが全々間違つてゐるか、でなければ君はその言葉が誰から出たに拘らず、何んな嫌な形をしてゐるに拘らず、兎に角眞實を聞いてゐるのです。私は今何處から君が出て來られたか告げました。」

「歐羅巴旅館からですよ。それが何うしたんです？」

「私は無論、君が誰に逢ひに行つたのか知つてゐます。」

「え？」

「君はラトミロフ夫人に逢ひに行つたのです。」

「え、あの人に逢ひに行きました。それから？」

「それから？……タチアーナ・ペトロウナと婚約してゐる君が、君が愛しもし、……また愛されもしてゐるラトミロフ夫人に逢ひに行きました。」

リトウイノフは直ぐ立上つた。血が頭に逆上するのを感じた。

「何の事ですか？」と彼は興奮した聲で叫んだ、「馬鹿げた悪戯で探偵ですか？ すつかり話してお終ひなさい。」

「あゝ、私の云ふことに腹を立てないで下さい。グリゴリー・ミハリツチ、腹を立てたら間違ひで

す。私はそんなつもりで話してゐるのぢやないんです。私は今、悪戯なんかする氣にはなれないので
す。」

「さうでせう、さうでせう。君の意志が立派なことは私も知つてゐます。けれども何故君は何の関係
もない他人の内輪の話にまで干渉なさる権利があるのです、また何故君は自分の言葉がそんなに本當
だと信じ込んでゐらつしやるのです？」

「信じ込む！ 若しそれが私の想像したことだつたら君も怒りはなさらないでせう。また権利と仰つ
しやいましたが、私はまだ溺れかゝつてゐる者を救ふ際に自分にそんな権利があるか何うか考へてみ
る人は無からうと思ひます。」

「御親切な御心配は有難ふございますが、私は今そんなものは些つとも要求してゐないのです。そし
て社交界の婦人に導かれた世間知らずの青年の墮落や、流行界の不道德なことなどを説いて下さつて
も、私にはそれが何うしても下らない言葉としか思はれないのです。ですから何うか私を救はうとな
さることなんかお止めになつて、私を穩やかに溺れさして下さい。」

パツギンはまたリトウイノフを見た。リトウイノフの息使は烈しく、唇はびり／＼顫えてゐた。

「然し私を見て下さい、」と云つてパツギンは自分の胸を叩いた、「この私が月並な自分で満足してゐ

る道學者や説教家などと同じやうに見えますか？ 君に對する興味からだけでは、何んなに其の興味
が強いにしても、私は其爲に一口も云はないし、また其の爲に私の大嫌ひな無遠慮な出しやばりの故
を以つて君から非難されることもないのですが、君にはそれがお解りにならないのですか？ そんな
事とは全く違つた事だとは思ひませんか、君の前に矢張り君と同様に熱情の爲に酷い目にあつて毀れ
てしまつた男が一人あつて、その男が自分の結果を考へて君を救はうとしてゐるのです。そして……
そして相手も同じ女なんです！」

リトウイノフは一足後ろに身を退いた。

「そんなことが？ 何ですつて……君が……君が……ソバント・イワニツチ？ だつてピエルスキ
ー夫人……あの子？」

「あゝ、そんなに問ひ詰めないで下さい……私を信じて下さい！ それは暗い怖ろしい話です。また
私もその話をしやうとは思ひません。ピエルスキー夫人は私もよく知りませんし、あの子も私のでは
ないのです。ですが私が引受けてしまつたのです……何故といふに……イリーナがそれを望んだから
です。あの人にそれが必要だつたからです。何故私はこの嫌なバーデンに來たか？ 本當に君は私が
忠告をするのは同情の念から來たのだと云ふことは、些つとも想像出來なかつたでせう？ 私はあの

可愛らしい、善良な君の許嫁を氣の毒に思つてはありますが。君の未來、君たち二人を私が何うすることが出来ませう？……けれども私はあの人のことが心配なんです……あの人のことが。」

「御親切に有難うございます、パツীগン。然し君の言葉に従へば私たち二人が同じ位地にあるやうですが、何故その言葉を君自分に當てはめないのです、そして君の御心配を他の感情から来たものとする事が出来ないのです？」

「他の感情つて嫉妬のことですか？ あゝ、まだお若いからそんなに胡麻かしたり口實を云つたりなさるがそれはあなたの恥ですよ。今私の唇で話してゐるのは辛い悲哀だと云ふことに氣が附かぬのは恥ですよ。いゝえ、私は君とは違つた位置にあるのです。私は老耄れて滑稽になつた役に立たぬ馬鹿なんです——けれども君は、然しこんな事を云つても詰らない。君は今私が満足して受けてゐるこの地位を、ちよつとの間でも受けることは出来ません。嫉妬だなんて仰つしやるが、希望と云ふものを一滴でも持つたことのない男は嫉妬なんかは知りません。またこんな感情を経験したのは初めてでもないのです。私はたゞあの人が……たゞあの人が氣の毒なのです、解りましたか！ そしてあの女に云ひつかつて私が君の處に來た時に片に對し「濟まないと思つた感情——あの女がこの感情をさう云ひました——その感情があつた女をこれほど深く動かさうとは思ひませんでした。」

「然し失敬ですが、ソゾント・イワニツチ、君は知つてゐらつしやるやうですね……」

「私は何も知らないと同時に何も知つてゐます！ 私はあの女が昨日何處にゐたかも知つてゐます。」と云つて彼は顔を素向けた。「けれどもあの女を何う支へることも出来ないです、丁度轉がる石の様に底まで轉がらなくちや止まらないてせう。若し私の忠告で、君が直ぐ引返すと思つたら私は馬鹿です……相手があんな女だのに……然しこんな話は止ませう。唯私は黙つてゐられなかつた、これが全部なんです。また誰がこれを知つてゐて止めずにゐられませう？ 多分君はまたこの事を考へるでせう。多分私の云つた言葉の或るものは君の心の奥に這入つて、……はあの女や、君自身や、あの無邪氣な可愛らしい女を破滅に導くやうなことはしないでせう……あゝ！ 怒つちやいけませんよ！ 私に何の怖れる處がありません？ 私に何で遠慮しながらびく／＼云ふ必要がありません？ 私は嫉妬して饒舌つてゐるのではないのです。怒つて饒舌つてゐるのでもないのです……私は君の前に跪いて……もお願ひします……最う失禮ませう。心配することは無いです、これは秘密にしますから。君の爲を思つてした事なんです。」

パツীগンは並木路を大股に歩いて間もなく暮れかゝつた夕闇の中に姿を隠した。リトウイノフも彼を引止めようとはしなかつた。

「それは暗い怖ろしい話です……」とリトウイノフが云つた。けれども其の話を自分では説明しなかつた……此處で短かくかいつまんで其の話をして置かう。

それは今から八年前の事であつた。彼は自分の勤めてゐる處からライセンベツハ伯爵の書記となつて行つたことがあつた。丁度夏であつた。パツীগンはよく書類を持つては田舎の別荘に行き時には終日其處で暮らしたこともあつた。イリーナはまだ其の時には伯爵の家にあつた。彼女は低い身分の者に對しては決して高慢でなく横柄ぶる様なこともなかつたので、伯爵夫人が彼女の莫斯科式な親密な態度を叱つたことも一度やそこらではなかつた。イリーナは直ぐこの、きちんと制服のフロックコートトの釦を締めた身分の低い書記の中に賢い人を發見した。彼女は熱心に彼と話をする様になり……彼は……彼の方では窃かに熱烈に彼女を戀するやうになつた……窃かに！と彼は思つてゐた。その中に夏が過ぎたので伯爵は外部の助手を要しなくなつた。パツীগンはイリーナを見ることが出来なくなつたが忘れることは出来なかつた。それから三年たつて彼は第三者から思ひがけもなく彼が幽かに知つてゐる或る婦人に逢ひに行くやうに招待状を受取つた。この婦人は始めの中は口に出しかねた様子だつたが、この事は是非内密にするとパツীগンに約束した後彼に……一人の少女と結婚してくれと頼んだ。その少女と云ふのは交際社界でも著しい地位を占めた人で何うしても結婚が必要な境遇

にあつたのだ、婦人はその本人のことはあまり云はないでたゞ金の約束を仄めかした……その金は莫大な額であつた。パツ、ギンは餘りの驚きに腹を立てることも出来なかつたが、無論その場で素氣なく斷つてしまつた。すると其の婦人は彼に手紙を渡した——イリーナからの。それには斯う書いてあつた。「あなたは御寛大で高潔な人ですから妾の爲に何んな事でもして下さることゝ思ひます。でお願ひ致し度いのですが、妾の非常に親しい女を助けて下さいませんが。其の女を助けて下されば妾も助かります……理由は聞かないで下さい。他の人々は決して斯んな事をお願いする氣にはなれないのですが、あなたには妾の両手を上げて妾の爲に左様して下さいとお願ひいたします。」パツ、ギンは暫く考へた後で、イリーナ・パウロウナの爲なら何んなことでも仕様と思つてゐるが、彼女の意志は何卒彼女の唇から聞かして貰ひ度いと云つた。面會は其の夜行はれたが餘り長い時間でもなく、例の婦人の他は誰もそれを知らなかつた。イリーナは最早やライセンベツハ伯爵の家に住んではゐなかつた。「何故澤山の人の中から私をお選びになつたのです」とパツ、ギンは彼女に訊ねた。

彼女は彼の高潔な性質を説きはじめてが急にそれを止めて、

「いゝえ、本當のことを云はなくちやなりません。妾はあなたが……あなたが妾を愛してゐらつしやることを知つてゐます。それでお願ひすることに決心したので……それから彼女は總て打明けた。

エリザ・ピエルスキーは孤兒であつた。親族の者は皆彼女を嫌つた。そして彼女の遺産を欲しがつてゐた……彼女は破滅に向ひ合つてゐたこの少女を斯んな羽目に落した一人の男は其時イリーナと非常に密接な關係の間柄に立つてゐたので、イリーナがこの少女を助けることは其の男の爲にも奉仕になるのであつた……パツギンは長い間黙つてイリーナの顔を見入つてゐたが終ひにとり／＼承諾した。彼女は彼の頸根に締め限いて泣いた。そして彼も泣いた……。けれども二人の涙は全く違つた涙であつた。内密の結婚の用意は早や備つてゐて、或る權力ある手が總ての障礙を除き去つた。……けれども病氣が襲つて來た……それから女の子が生れ、それから母は自分で毒を仰いだ。子供を叫うしたらいゝだらう？ パツギンは其の子を同じ手、イリーナの手から受取つて世話をすることになつた。暗い怖ろしい話——それを濟まして元に歸らう！

リトウイノフが宿に歸る氣になつたのは一時間の後のことであつた。宿に近くなつた時後ろに足音がするのに氣が附いたが、その足音は執拗く彼の跡を追つて、彼が早く歩けば其の足音も急いでゐるらしかつた。街燈の下を通り過ぎた時にリトウイノフが振返つてみたら、それはラトミロフ將軍であつた。彼は白い襟飾に洒落れた外套の前を擴げて、上着の釦の穴に飾つた星の輪や、金の鎖につけた十字を見せながら一人宴會から歸る處であつた。剛慢にしぶとくリトウイノフを見つめる彼の眼は餘

りな輕蔑と憎惡を含んでゐて、彼の全體の態度が頗る挑戰的だつたのでリトウイノフも自分の忿怒を殺しながら彼の前に進み出て「恥辱」と面するのが自分の義務の様な氣がした。けれどもリトウイノフが近づくとき將軍の顔は急に變つて何時もの洗練された如才ないものとなつて、蒼白いラウエンダートの手套をはめた手で帽子を高く空中に振つた。リトウイノフも黙つて帽子を取つた。そこで二人はまた自分の道を歩いた。

「屹と彼奴は何か感づいたに違ひない！」とリトウイノフは思つた。

「若しこれが……他の者だつたら！」と將軍は思つた。

リトウイノフが宿に歸つてみたらタチアーナは伯母と骨牌を切つて遊んでゐた。

「まああなたは非道い人ですね、」とカピトリーナ・マルコウナが手にした骨牌を投出して叫んだ。「妾たちが着いた日から一晩中留守にするなんてことがあるものですか！ 二人は此處で待ちながら小言ばかり云つてゐたのですよ……」

「妾何も云ひはしませんでしたよ、伯母様」とタチアーナが云つた。

「お前がおとなしいのは誰でも知つてゐる！ あなたは恥かしいとお思ひなさい！ 婚約までしてゐるのに！」

リトウイノフは何やら言譯をしながら卓子の前に座つたが暫く黙つてゐた後口を聞いて、

「何うして骨牌を止めたのです？」と訊ねた。

「よくそんなことが訊ねられますねえ！ 妾たちは他にすることが無いもんだから、最う飽きくするほど斯んな事をしてゐたのです……其處にあなたが歸つて來られた。」

「夜の音楽でもお聞きになるのですしたら御案内いたしませうか？」

カピトリリーナ・マルコウナは、姪の顔を見た。

「行きませう、妾用意は出來てゐますから、伯母様、」と彼女が云つた、「ですけど家にゐた方がいゝでせうかねえ？」

「その方がいゝさ！ これから莫斯科流に沸湯器で茶でも沸かして飲みながら、話でもしよう。まだ妾たちは、ゆつくり話もしないのだから。」

リトウイノフは茶を命じたが面白い話にはづまなかつた。彼は始終良心に責められて何を話しても其れが嘘の様に思はれ、また其の嘘だことを、タチアーナに見透かされてゐるやうに思はれるのだつた。タチアーナの心には何のわだかまりもないらしく何の變つた點も見られなかつた……柔らかい臆病な目差でリトウイノフを掠める様に見て直ぐ視線を外らすことはあつても彼を見詰めることはなかつた。そして顔も平常より蒼かつた。

カピトリリーナ・マルコウナは頭痛がするのぢやないかと訊ねた。

タチアーナは否と云ひかけたがちよつと考へ直して、「えゝ、ちつとばかり、」と云つた。

「旅行したからです、」とリトウイノフは云つたが恥かしくて赧くなつた。

「えゝ、旅行したのです、」と繰返してタチアーナはまた掠める様に見た。

「お前最うお休みよ、タチアーナ。」

「えゝ、直ぐ休みます、伯母様。」

卓子の上に旅行案内が載つてゐたので、リトウイノフは取り上げて其の中のバーデン近郊の記事を聲をあげて讀み始めた。

「そりやさうです、」とカピトリリーナ・マルコウナが遮つて、「だけどもまだ忘れぢやならないことがあるのですよ。此處はリンネルが大層安いさうですからね、是非それを結婚の準備に買はうと思つてゐるのですよ。」

タチアーナは眼を落して、

「だつて妾たちはまだ間がありますからね、伯母様。あなたはちつとも、自分の事をお考へにならな

いのですけど、あなたどつて何か着物をお拵へにならなくちや。此處の人たちは皆んな、さつぱりした風をしてゐるぢやありませんか。」

「だつてお前、そんなことをして何になります？ 妾は綺麗な女ぢやないんだもの！ そりや妾だつてあなたのお友達のように、美しかつたらね、グリゴリー・ミハリツチ、あのお友達の名は何でしたかね？」

「何んな友達ですか？」

「今日道で出逢つた人ですよ。」

「おゝ、あの人ですか！」と云つてリトウイノフは何喰はぬ顔は装ひながらまた不快と恥かしさを感じた。そして心の中で、「否、何うしてこのまゝで遣つて行けるものか！」と思つた。

彼は許嫁の女の傍に座つてゐたが、女から僅か二三寸離れた彼のポケットにはイリーナのハンケチが仕舞つてあるのだ。

カピトリーナ・マルコウナはちよつと隣の室に行つた。

「タチアーナ……」とリトウイノフは精を出して呼んだ。今日彼が女の名を呼んだのは是れが初めてなのである。

彼女は彼の方に向いた。

「私は……私は是非あなたにお話ししたいことがあるんです。」

「まあ！ 本當に？ 何時？ 今？」

「いゝえ、明日。」

「おや！ 明日。よろしうございます。」

リトウイノフの心は急に限りない憐れみの念に満たされた。彼はタチアーナの手を取つてまるで罪人の様にへりくだつて其れを接吻した。彼女の心臓は幽かに波打つたが幸福には感じなかつた。

夜半の二時頃、姪と同じ室に寝てゐたカピトリーナ・マルコウナは不圖、頭を起こして耳を澄ました。

「タチアーナ、お前泣いてゐるのかへ？」

タチアーナは直ぐには答へなかつたが、暫くして、

「いゝえ、伯母様、妾風を引きまして、」と云ふ彼女のおとなしい聲が聞こえた。

「何うしてあんな事をタチアーナに言つたのだらう？」とリトウイノフは翌朝自分の部屋の窓際に腰掛けながら思つた。そして當惑したらしく肩を揺すつた。彼は自分の總ての逃道を斷つ爲にあんな事をタチアーナに云つたのであつた。窓の傍には十二時に逢つてくれと書いてあるイリーナの手紙が載つてゐた。パツীগンの言葉は地の底で幽かに轟く不吉な響きの様に斷えず彼の心に甦つて來た。彼は自分で自分をもどかしくて癪に觸つて堪らないのだが。それかと云つて何うする譯にも行かなかつた。誰かど扉を叩いた。

「What's up?」とリトウイノフが訊ねると、

「やあ！ ゐるね！ 開けてくれ！」とピンダソフの嘎れた低音が聞こえた、扉の把手が軋つた。

リトウイノフは憤怒に眞つ蒼になつて、

「僕はゐない、」と鋭く奴鳴つた。

「ゐない？ 冗談ぢやないよ！」

「ゐないと云つたら、お歸り。」

「これは恐れ入つた！ 金を少しばかり借りに來たんだが、」とピンダソフが呟いた。

けれども彼は聽て何時もの如く踵を踏み鳴らして立去つた。

リトウイノフはこの忌ま／＼しい男の咽喉頭を後から斷寄つて絞め殺して遣りたいとさへ思つた。

此の二三日の出來事で彼の神経はすっかりゆるんでしまつて、今にも聲をあげて泣き出し度いほどであつた。彼は冷たい水を一杯飲んで、自分でも何故か解らぬなりに總ての抽斗の鏝を掛けて、それからタチアーナの部屋に出掛けた。

部屋にはタチアーナが一人ゐた。カビトリーナ・マルコウナは買物に出たのだ。彼女は長椅子に腰かけて両手に本を支へてはゐたが、讀んでゐるのでもなければ、其れが何の本であるかさへ知らないのだ。彼女は身動きもしないが心臓は烈しく波打つて、その度毎に頸根の小さい白い襟が靜かに顫るえてゐた。

リトウイノフは當惑した……けれども彼女の傍に坐つてお早やうと挨拶して。微笑し、彼女の方でも黙つたまゝ微笑した。彼女は彼が這入つて來た時に親しげにはなく、恭々しげにお辭儀をしたが彼に眼を注ぎはしなかつた。彼が手を差伸ばすと女の方でも冷たい指を與へたが、すぐ放してまた本を取上げた。リトウイノフは重要でない話をするのは、此の場合タチアーナを侮辱するものだと思つた。タチアーナは彼女の癖で自分の方から要求はしなかつたが、彼女の全體の調子は、「妾は待つてゐ

ます、妾は待つてゐます。」と云つてゐるやうに見えた……彼は何うでも約束を果たさねばならぬ。けれども殆ど終夜のことばかり考へつめたのだが、話の緒口さへ準備することが出来ず、何うして此の慘酷な沈黙を破つていゝかさつぱり解らなかつた。

「タチアーナ、」と彼は漸く口を開いた。「昨日あなたに云ふことがあると云ひましたね。これからそれを云はうと思つてゐるのですが、其の前に斷つて置きますが、どうか私を怒らないで下さい、そしてまた是非承知して置いて貰ひ度いのは私があなたに對して持つてゐる感じは……」

彼は言葉を切つて息をした。タチアーナは矢張り身動きもせねば、彼に眼を注ぎもしなかつた。彼女はたゞ一層強く本を握り締めただけであつた。

「私たち二人は、」とリトウイノフは先の文句を云つてしまはないう中に言葉を續けた。「私たち二人は何時でも隠し立てをしないで來ました。また私はあなたを尊敬しますから、あなたの前で偽善者にはなり度くないのです。私は自分が何れほどあなたの性質の高尙で獨立的な點を尊んでゐるか云ふことをあなたに示したいのです、たとひ……無論たとひ……」

「グリゴリ・ミハリツチ、」とタチアーナは死人の様に顔を眞つ蒼にして、聲だけは取亂さぬ聲で云つた。「妾が云つて上げませう、あなたは最う妾を愛してゐらつしやらない、そしてそれを何う妾に告げ

ていゝか迷つてゐらつしやるのです。」

リトウイノフは思はず肩を揺すつた。

「何うして?」……と彼は聞こえないほどの聲で云つた。「何うしてそんなことを仰つしやるの?……私にはさつぱり解らな……。」

「えー さうなんでせう? さうなんでせう? ——云つて下さい、云つて下さい。」

タチアーナは全くリトウイノフの方に向直つてしまつて、髪を後ろに撫でつけた顔を彼に近づけながら、今まで長い間彼に注がなかつた眼で、彼の眼を貫くほど凝と覗き込んだ。

「ね、さうでせう?」と彼女がまた繰返した。

彼は何も云はなかつた、一口も云はなかつた。今何んな事を云つても女はそれを信じもしれば、またそれによつて救はれもすると云ふことは彼も知つてはゐたが、それでも彼は此の嘘をつくことは出来なかつた。そして自分を覗き込む女の眼さへ堪えがたいものと思つた。リトウイノフは何も云はなかつた。けれども女は返事を要しなかつた。女は彼の沈黙そのものゝ中に返事を讀んだ。其のうつむけた眼の中に返事を讀んだ——彼女は顔を素向けて本を落した……彼女は其の時までまだ眞實を知らなかつたのだ。リトウイノフにもそれが感じられた。彼女が今まで眞實を知らなかつたことがリト

ウイノフにも感じられた——そして彼のした事が何んなに怖しい、實際怖しい事だつたらう。

彼は女の前に倒れるやうに跪いた。

「タチアーナ、」と彼が叫んだ、「こんな風になつてあなたに會ふのが何んなに辛いかこんなになつたも皆んな唯私が——私が！ 私は自分もあなたも失つてしまつた。總てのものを失つてしまつた。……總てのものを毀してしまつた！ タチアーナ、總てのものを！ 私が……私が自分の一番好い友達、自分の守神の天使のやうなあなたに、こんな打撃を興へるやうにならうとは、夢にも思ひませんでした。こんな逢ひ方をして、昨日の様な、拙い日を過ごすやうにならうとは、私は、私は夢にも思ひませんでした！……」

タチアーナは立上つて部屋を出ようとしたが、彼が着物の裾を取つて引き止めた。

「最少し私の云ふことを聞いて下さい。斯うして私はあなたの前に跪いてはゐますが、あなたの許しを乞ふてゐるのぢやないので。あなたは許すことも出来なければ、また許さないのが當り前でもあるのです。私はたゞあなたの友達が墮落してどんな底に落ちてゐることゝ、あなたと一緒にどん底に誘ひ度くないと云ふことを告げさへすればいいのです。……けれどもあなたに救つて頂く……否！ 幾らあなたとつて私を救ふことは出来ません。私はあなたを突きつけなくちやならない。私は最う

破滅してゐるんです、タチアーナ、最う何することも出来ないほど破滅してゐるんです。」

タチアーナはリトウイノフを見た。

「あなたが破滅してゐらしやる？」と、腑に落ちかねた様子で彼女が訊ねた、「あなたが破滅してゐらしやる？」

「えゝ、タチアーナ、私は破滅してゐるんです。私の總ての過去、總ての貴かつたもの、今まで私が生きて來た總てのものは破滅してしまつたのです。何もかもみじめに打毀されてしまつて、これから何うなることやら自分にもさつぱり解らないのです。あなたは最うあなたを愛しないと仰つしやいました……そりや違ひます、タチアーナ、私は愛さなくなつたのぢやないのですが、他の變つた、怖ろしい、何うにもならない熱情が私を襲つて來て押さへつけてしまつたのです。私は出来るだけはその力と戦つたつもりだつたのですが……」

タチアーナは眉をひそめ、蒼い顔を暗くして立上つた、リトウイノフも身を起こした。「あなたは他のもを愛してゐらしやるんですわ、」と彼女が云つた、「誰だか妾知つてゐます……昨日逢つた人で、逢つたぢやありませんか？……ようございます、妾も覺悟してゐます……あなたが其の感情を何らすすることも出来ないと思つしやるのなら……」(タチアーナは此處で言葉を切つて次の言葉を云はせ

ない様にリトウイノフが瀕るかと思つて、それを待つたが彼は何も云はなかつた。「妾もあなたのお約束をお返しするより他ありません。」

リトウイノフは當然受くべき打撃を甘んじて受けるやうに頭を垂れながら、

「あなたが腹をお立てになるのは當り前です。私の意氣地のないこと……欺いたことなどをお責めになるのは當り前です。」

タチアーナは彼に眼を呉れて、

「妾は何もあなたを責めはしません、リトウイノフ、あなたを咎めはしません。妾も昨日の様なことがあるよりか、苦しくても打明けた方が好きです。まあ妾たちは何と云ふ運命なんぞでせう！」

「私は何と云ふ運命なんぞだらう！」とリトウイノフは心の中で悲しさうに嘆いた。

タチアーナは寢室の扉の方に近よりながら、「少しの間一人休ませて下さい、グリゴリー・ミハリツチ——また最う一度逢ひませう、また話させよう。あんまり意外でしたもんですから、些つと落着いて考へてみなくちや……休ませて下さい……我儘ですけれど。また後で最う一度逢ひませう。」

かう云ひ棄ててタチアーナは素早く姿を隠して扉に錠をかけた。

リトウイノフは眼が眩んだ人のやうになつて街に出た。彼の心の奥の方には或る暗い、痛いものがある

つたが、この感じは人を殺した後で経験する感じに似てゐた。それと同時にまた嫌な重荷を卸したやうな氣もした。リトウイノフはタチアーナの寛大な心に打たれた。そして自分が失つた總てのものを、あり／＼と目の前に見ることが出来た……とは云へ彼の悔恨の中には焦燥も混つてゐて、彼に残された唯一つの逃げ場所はイリーナより他にないのだと思ふと、彼女に對して心苦しい感を抱かざるを得なかつた。此の頃リトウイノフの心は次第に複雑に、次第に複雑になつて来て、彼は、その複雑な混沌に悩まされたり、怒つたり、其の混沌の中に茫然と自失したりした。彼は唯一つの事を乞ひ願つた。この何うしていか解らぬ薄暗い混沌から一刻も早く逃げ出すことが出来るなら、何んな處でもいゝから逃げ出してみたいと云ふ、その一事のみが彼の現在の望みであつた。リトウイノフの様な現實的な人間は熱情の爲に我れを忘れることはない、そんなことは其の人の生活の意味を毀してしまふと云ふ……けれども自然は我々人間の論理や理窟に構つてはゐない。自然には自然の論理があつて。我々人間はその車輪の下に粉碎されるまでは其の論理に氣が附かないものだ。

リトウイノフがタチアーナに別れた時からの唯一つの考へはイリーナに逢ふことであつた。彼はイリーナの宿を訪れた。然し丁度將軍がゐた。間もなくして門番はさう告げた。自分には偽善なんか出来ないと信じてゐる、リトウイノフはイリーナに逢はないこととして對話館の方に足を向けた。リトウ

イノフに偽善が出来ないといふことは其の日出逢つたウオロシロフとピシユチャルキンに解つた。彼はウロシロフに向いては素氣なく今日は空の太鼓の様な氣がすると云ふ、ピシユチャルキンに向いては皆んなを苦しめて來たと云つた。ピンダソフは先刻彼の宿に來たからいゝやうなもの、若し此處で出會したとしたらそれこそ一層「大きい騒ぎ」になつたであらう。若い人は二人とも度を失つてしまひ、ウオロシロフなどはこれでも自分の士官としての名譽が保てるのかしらと考へたほどだつた。けれども彼は丁度ゴーゴリのピロゴフ中尉のやうに珈琲店の麵麩とペタで氣を鎮めてゐた。リトウイノフは遙か向ふの方に縞の外套を着たカピトリーナ・マルコウナが、店から店と急がしさうに歩を運んでゐるのを見た……彼はこの善良な、一告な、寛大な老婦人と面を向けるのを恥かしく思つた。それから彼はパツギンを思ひ出し、彼と取交した昨日の會話を懐ひ出した……不圖彼は或る物の身近く漂つて來るのを感じた。觸れ難い、同時にまた確實な或る物の漂つて來るのを感じた。若し落ちて來る影が芳香を放つとしても、是れほど捕へ難いことはあるまい。けれども彼は直ぐそれがイリーナだと感づいた。果して彼から二三歩距てた處に或る一人の婦人と腕を組合はしたイリーナの姿が現れ、二人は目と目を見交した。イリーナはリトウイノフの顔に妙な影を認めたらしかつた。彼女は黒い森で造つた小さい柱時計を並べた店の前に立止まつて顔を振りながら彼を呼び、其の時計の面に描いた

時鳥の美しきを褒めた後で、囁くやうにではなく、口に出した言葉を云つてしまふやうに、「一時間の中にゐらつしやい、一人ゐますから、」と傍の人たちの注意をきかないやうに當り前の聲で云つた。丁度この時有名な女殺しのウエルディエ氏が彼女の前に身を屈めるやうに、くるづきながら彼女の朽葉色の着物や、肩のあたりまで傾けて冠つた浅い西班牙帽の色などに見惚れて恍惚としてゐた……トウイノフは人込みの中に姿を隠した。

二十一

「グリゴリー、二時間後にはイリーナがリトウイノフと一緒に長椅子に座つて兩手を彼の肩にのせながらかう云つてゐた、「何うなさつたのです？ 誰も來ない間に早く云つて下さいな。」

「何うしたつて？ 私は幸福なんです、幸福なんです。たゞそれだけなんですよ。」
イリーナは彼を見下して微笑しながら溜息をついた。

「あなたそんな事を仰つしやつたつて、そりや妾への御返事ぢやありませんわ。」
リトウイノフは凝と考へて、

「ちや云ひませうね……そんなに仰つしやるのなら、」(イリーナは眼を大きく見開いて幽かに身を顫

はした、」今日あの女に何もかも打明けてしまひました。」

「え、何もかも？　ぢや妾の事も？」

リトウイノフ兩腕を投げ出して、

「イリーナ、何うしてそんな事が出来るのです！　私が——」

「御免下さい……御免下さい。ぢや何う仰つしやいました。」

「最うお前を愛してゐないと云ひました。」

「その理由をお訊ねになつたでせう？」

「詐らずに他の女を愛してゐることを告げて別れなくちやならない譯を話しました。」

「まあ……であの方は何うなさいました？　得心されました？」

「イリーナ、何と云ふ女でせう！　本當に献身的な、寛大な女です！」

「本當にねえ、本當にねえ、……でも左様するより他にあの方には方法が無かつたのですわ。」

「そしてあの女の全生涯を傷つけ、欺き、無慘にあの女を投げ棄てたこの私に對して、たゞの一口の答めたてもしませんでした。」

「イリーナは自分の指の爪をじろく見詰めながら、

「で、何ですか、グリゴリー……あの方はあなたを愛してゐらしたのですか？」

「ええ、イリーナ、愛してゐたのです。」

イリーナは暫らく黙つてゐたが聽て着物を正して、

「正直に申しますが、妾には何うしてあなたが打明けになつたのか合點が行きませんわ。」

「何うして！　だつてあなたは私があの女に對して偽善者になれると思つてゐらつしやるのですか？」

あの純潔な女に對して？　それともまた——」

「妾は何とも思つちやゐません、」とイリーナ遮つて、「あの方の事は何も餘り知つてゐません。一時に

二人のことは考へられませんから。」

「そのお言葉の意味は——」

「それから何うしました？　あの純潔な方はお歸りになるのですか？」とまたイリーナが遮つた。

「私には解りません。最う一度逢ひますが、あの女が逗留することはないでせう。」

「まあ！　bon voyage！」

「逗留はしないでせう。然し、私もあの女の事を今考へてはゐません。私はあなたが仰つしやつたと、約束された事を考へてゐるのです。」

イリーナは上眼を使つて彼を見入りながら、

「恩知らずですねえ！ まだ何か不足なんですか？」

「ええ、イリーナ、まだ不足です。あなたは私を幸福にはして下さいましたが、まだ不足ことがあります。お解りでせう？」

「つまり妾が——」

「ええ、お解りでせう。あなたのお言葉、手紙に書かれた事を思ひ出しても下さい。私は他の人と一緒にあなたを持つことは出来ません。そんな事が出来るもんですか。あなたの秘密の情人になるやうな、そんな憐れな役目は仕度くはありません。私は自分一人の生命だけでなく、他の人の生命まであなたの足元に投げ出してしまつたのです。私は何もかも棄てとしまひました。何もかも惜氣もなく思ひ切つて塵の様に碎いてしまひました。然し其の代りには、あなたが約束を守つて下さつて、永久にあなたの運命を私の運命と一緒にして下さることを固く信じて疑ひませんです。」

「あなたは妾と一緒に逃出さうと仰つしやるのでせう？ 妾は何時でも……」（リトウイノフは悦びに夢中になつて女の両手の上に身を屈めた。）「妾は何時でも。云つたことを取消しなんかしませんわ。ですけどあなたは左様するとすればいろ／＼の困難があるのをお考へになりましたか——御用意が出

来ましたか？」

「私？ まだ何も考へたり、用意したりする暇はありませんでした。然し實行することは確です。そして一ヶ月たゝない中に……」

「一ヶ月！ 二週間の中に妾たちは伊太利に行きますわ。」

「私も二週間で充分ですよ。イリーナ、あなたは私の話をあまり冷淡に聞いてゐらつしやる。あなたは實行出来ないやうにお考へかかも知れませんが、私だつて小供ぢやありませんから、空想だけで自分を慰めることは出来ませんよ。私はこれが何れほど大變なことか、また何れほど責任の大きいことかもよく心得てゐます。けれどもこれより他に方法はないのです。考へて下さい、私はあなたの爲に犠牲にしたあの女から、卑しい嘘つきだと思はれさへせねば、過去のどんな束縛でも破るつもりですから！」

イリーナは急に身を引いて眼を輝かした。

「おゝ、どうぞお許し下さい、グリゴリー・マハリツチー、妾が決心するとすれば、妾が逃げるとすれば、少なくともそれは妾の爲にだけにすると一緒にございまして、血の代りに水とミルク、*coupe* を血管の内に持つた無^い覺の若い女から悪く云はたまひとして、左様する人と一緒にではあり

ません！ それからまた申し上げますが妾が尊敬して居る人が憐れむべき役目をしてゐると聞くのは初めてです！ 妾は最つとく憐れむべき役目をしてゐる人、自分の心の中で何事が起りつゝあるかも知らない人を知つてゐますわ！」

今度はリトウイノフが身を引いて、

「イリーナ、」と云ひかけた——

と、忽ち女は両手で自分の頬を叩いて急に烈しく男の胸に縋りつき、女とは思はれないほどの力で抱きしめた。

「御免下さい、御免下さい、」と彼女は顫へる聲で云つた、「御免下さい、グリゴリー！ まあ妾は何と云ふ腐敗した、怖ろしい、嫉妬深い、意地の悪い女でせう！ 妾がどれほどあなたの助けを求め、あなたの御寛大を求めてゐるか、あなたどつて御存知ですわ、お助け下さいね。そして妾が駄目になつてしまはないう前に此の泥の中から救ひ出して下さいね。一緒に逃げませう、こんな人たちのゐる社會を遠く離れて、何處か遙かな、美しい自由な國に逃げませう！ あなたのイリーナはやがてあなたがなざる犠牲より最つと大きい犠牲にかなふでせう何うか腹を立てないで、妾を許して下さいね、そしてあなたの仰つしやることなら妾どんな事でもして、あなたのお好きな處に行くと云ふことを、よく

覚えてゐて下さい！」

リトウイノフの胸は亂れた。イリーナは其の若い軟らかい體を前よりも一層強く彼に押しつけた。彼は女のいゝ香のする亂れ髪の上に身を屈めながら満足と歡喜に酔つてしまつて、自分の手で女の頭を撫でることも、自分の唇をそれに觸れることも忘れてゐた。

「イリーナ、イリーナ、私の天使……」と彼が繰返した。

と、急に女は頭を起こして聞き耳を立てた……

「良夫の足音です……自分の部屋に這入りました、」と呟いて突嗟に身をかわして、他の安樂椅子に腰かけた。リトウイノフが立上らうとすると……「何うなさる？」と同じ小聲で、「此處にゐらつしやい、あの人も疑つてゐますから。それともあの人を怖れてゐらつしやるの？」女は扉から眼を離さなかつた。「さうだわ、あの人だわ、直ぐ此處に來ますよ。何か云つて頂戴、何か妾に話して頂戴。」リトウイノフは直ぐには氣を取直すことも出來ないで黙つてゐた。すると女は大きい聲で、「明日芝居を見にゐらつしやいますか？ 今は丁度昔はやつた *De Re de Fan* を遣つてゐましてね、ブレイシイが？ そりや大變なんですよ……妾たちはまるで熱病に罹つてゐるやうですわ、」と聲を落して、「これぢや何も出來やしない、最つとよく考へてみませう。云つて置きますが、妾の金は皆んなあの人が持つてゐ

るのですよ、*mais j'ai me bijou*。西班牙に行きませうか、何うですあなた？」と云つたかと思ふとまた聲を上げて、「何故女優は皆んなふとるのでせう？ あのマデライン・ブローハンにしたところが、……何か仰つしやい、そんなに黙つて座つてゐらつしやらないで。頭が割れるやうだ。しかし妾を疑つちやいけませんよ……明日何處で逢ふかお知らせいたします。ですけどあの方に打明けなすつたはの失敗でしたわ……*Ah, mais c'est d'armani*」と急に叫んで神経質らしく打笑ひながらハンケチのレースの縁を千切つた。

「這入つてもいいか？」と次の室からラトシロフの聲がした。

「どうぞ……どうぞ。」

扉が開いて入口に將軍の姿が現れた。彼はリーウイノフを見ると眉をひそめたが、お辭儀をした、即ち上體を前に屈めた。

「お客様があるのとは知らなかつた。*Je vous demande pardon de mon ind icretion*。あなたはまだバーデンにお飽きにならないのですか、ムツシュエー——リトウイノフ？」

ラトミロフは何時もリトウイノフの名を云ふ時に口籠つて忘れて思ひ出せないやうな振をした……彼は帽子を馬鹿に高く上げて挨拶したり、名を忘れた様な風をしてリトウイノフの自負心を侮辱しようとするのだ。

「まだ飽きませんです、閣下。」

「さうですか？ 私は最うバーデンには飽いてしまつた。最う早く歸らうぢやないか、イリーナ・パウロウナ？ *Assez de Bade comme ac*。時に私は今日お前の爲に五百フラン勝つて來て遣つたよ。」

イリーナは媚びるやうな品を作つて手を差し伸ばして、

「何處に？ それでピンを買ひますから下さいな。」

「上げるよ、上げるよ……あなたお歸りですか、ムツシュエー——リトウイノフ？」

「はあ御言葉通り今歸らうと思つてゐます。」

ラトミロフはまた體を前に屈めて、

「ぢやまたー」と云つた。

「左差なら、グリゴリー・ミハリツチ、約束はお守りいたします。」とイリーナが云つた。

「何の約束？ 訊ねてもいいのか？」と良夫が聞いた。

イリーナは頬笑みながら、

「いゝえ、何でもないことなんですよ……今まで話してゐた何でもない事なんですよ。」

C'est à propos du voyage...ou il vous plaira. 御存知でせう——スタエルの本を？」
「あゝ！ あゝ！ あれなら知つてゐるよ。面白い本だ。」
ラトミコフは其の妻と非常に仲がよいらしく、妻の名を愛稱で呼んだりしてゐた。

二十二

「實際最う考へない方がいゝと、」リトウイノフは街を歩きながらまた胸騒ぎの湧上るのを感じつゝ繰返した。「萬事は最う決定したのだ。あの女は約束を守るのだから、最うたゞ必要な事を遣りさへすればいゝのだ……けれどもあの女はまだためらつてゐるらしい」——彼は頭を振つた。彼には自分の計畫が自分ながら餘り不思議に思はれ、何だか作り上げたやうな、不自然なところがあるやうに思はれた。人は何時までも同じ事を考へることは出来ない。人の考へは丁度萬化鏡の中にある硝子の粉のやうに次から次と變化して行くものだ——それを覗いて見ると早や内の形はすつかり變つてゐる。——リトウイノフは烈しい倦怠の感じに襲はれた……もし一時間の間でも休まれたら……然しイリーナは？ 彼はハツとして碌に考へもないでおとなしく自分の宿の方に足を向けた。今日は何だか鞠の様に一方から一方に叩きつけられるやうな気がした……そんな事は何うでも、結末をつけなければなら

ない。彼は自分の旅館に歸つて同様なおとなしく、麻痺したやうな無感覺で一刻の猶ほも躊躇もしないで直ぐにタチアーナに逢ひに行つた。

彼はカピトリーナ・マルコウナに出逢つた。一眼見て彼は彼女が何もかも様子を聞いたのだと知つた。可愛さうな老嬢の兩眼は泣き腫らされて、白髪の亂れた赤い顔に怒りと悲しみと、苦しきと、限りない驚きがあり／＼と讀まれた。今にもリトウイノフに飛びかゝでもするやうな物越したつたが、際どい處で踏み止まつて、唇を噛みしめながらじつと彼を見詰めた。さながら嘆願でもするやうな、また彼を殺さうとでもするやうな、それかと思ふと今度は是れは夢だ、無意味な、あり得べからざることだ、さうぢやないかと自分で自分を宥めてゐるやうな眼つきであつた。

「お歸り……お歸りですか、」と彼女が云つた……同時に次の部屋からの扉が聞いて、軽い足音をさしてタチアーナが現れた。透き徹るほど蒼白い顔はしてゐても極く落ついてゐた。
彼女は伯母を優しく片手で抱いて自分の傍に座らして、

「あなたもお座りなさい、グリゴリー・ミハリツチ、」と扉のそばに喪心したやうに佇んでゐるリトウイノフに云つた。「またお目にかゝれて嬉しふございます。伯母にあなたの御決心や二人で定めたことを話しましたら伯母もそれに同意してくれました……お互の愛がなければとても幸福は得られませ

ん。お互に尊敬だけでは駄目です。」(尊敬の言葉でリトウイノフは思はず眼を伏せた。)

「で後で後悔するより今別れた方がいゝかと思ひます。ね伯母様？」

「さうだとも、」とカピトリナ・マルコウナも相槌を打つた。「さうだとも、タチアーナ、お前の値打の解らないやうな人は……飛んでもない處に行くやうな人は……」

「伯母様、伯母様、」とタチアーナが遮つた。「妾の約束を守つて下さい。あなた御自身で何時も妾に仰つしやつたやありませんか、タチアーナ、眞實、何よりも眞實……それから獨立だつて。眞實は何時でも楽しいものとはきまつてはゐません、獨立だつてさうです。でなかつたら何處に其の價値があるのです。」

かう云つて彼女はカピトリナ・マルコウナの白髪を接吻し、さらにリトウイノフの方に向き直つて、

「伯母様と妾はバーデンを立たうと思つてゐます……さうした方が皆んなの爲にもいゝと思ひますから。」

「何時お立ちですか？」とリトウイノフが重い聲で訊ねた。彼は先刻イリーナがこれと同じ言葉を自分に云つたと思ひ出した。

カピトリナ・マルコウナが進み出ようとするのをタチアーナが其の肩を撫でるやうにして遮りながら、

「多分直ぐ立つつもりです。」

「そして、何方にお立ちですかお訊ねしてもいゝでせうか？」とリトウイノフは同じ聲の調子で訊ねた。

「一番にドレスデンに行つて、これから露西亞に歸るやうになるでせう。」

「しかし今になつて何うしてそんな事を知りたがるのです、グリゴリー・ミハリツチ？……カピトリナ・マルコウナが叫んだ。

「伯母様、伯母様、」とタチアーナがまた言つた。其處に短かい沈黙があつた。

「タチアーナ・ペトロウナ、」とリトウイノフが口を切つた。「今私の胸の中が何んなに苦しいかあなたにもお解りだらうと思ひます。」

タチアーナは立上つて、

「グリゴリー・ミハリツチ、最うどうか其の事は仰つしやらさいで下さい。……何卒ね。あなたの爲でないにしても、妾の爲にお願いいたします。それは随分長い間つきあつてゐるのですから、今あなた

の胸の中が何んなかぐらひは妾にだつてよく解ります。ですけれど今更そんな事を云つて古い傷をついてみたところで何にもならないぢやありませんか。」(此處で言葉を切つた。彼女は胸に込み上げて来る感情を抑へ、湧上る涙をじつとこらへて飲込んでゐるらしかつた……)「癒すことの出来ぬ傷をついて何になりますか？ それは時がたつのに任せようではありませんか。それからお頼みしたいことがあるのですが、グリゴリー・ミハリツチ、濟みませんが手紙が一つあるのですから、それを何うぞあなたが局に持つて行つて下さいませんか。大切な手紙なんです、伯母も妾も暇がありませんから……どうも濟みません。ちよつと待つて下さい……直ぐ持つて参りますから……」

入口の處でタチアーナは不安げにカピトリナ・マルコウナに眼を呉れた。けれども伯母は眞つ四角に濟ましこんで嚴肅な顔をして眉を皺め、唇をしつかり結んでゐるのでタチアーナもたゞ意味ありげにうなづいて見せたゞけで部屋を出て行つた。

けれども娘の姿が見えなくなつて扉が縮まると直ぐカピトリナ・マルコウナの嚴肅な威厳は影もなく消えてしまつて、身を起したかと思ふと拔足でリトウイノフの方に走りより、彼の顔を覗き込むやうに身を屈めて泣聲を顫はして囁いた。

「まあ、グリゴリー・ミハリツチ、一體何うしたと云ふのです？ 夢でも見てゐるのですか？ タチ

アーナを見棄るなんて、嫌にでもなつたのですか？ 石垣の様に固い人だと思つてゐたあなたが斯んなことをなさる！ あなたが？ あなたが？ グリーシャ？……カピトリナ・マルコウナはちよつと言葉を途切らしたが、返事は待たないで涙で兩頬を濡らしながら言葉を續けた、「それぢやまるであの子を殺すやうなものですよ、グリゴリー・ミハリツチ、あの子のする事であの子を判断しちやいけませんよ。あなたはよくあの子の性質を知つてゐなさはづだ！ あの子はちよつとも苦情なんか云はないで、自分の事は遠慮してゐるのですから、其處は他の者が考へてやらなくちやなりません？ あの子は「伯母さん、妾たちの顔はつぶしたくはありません、」と云ふのですが、今にも死なうとしてゐる場合に顔をつぶすも何もあるものですか。……次の部屋でタチアーナの椅子が軋る音がした。「ほんとは、死ぬのは解つてゐます、」と老婦人は一層聲を低くして續けた。「何うしてそんな氣になつたのです？ 魔にでも取りつかれたのですか、何うしたのです？ たつた此の間まであの子に優しい手紙を書いてゐたんぢやありませんか。また本當に正直な男にこんな事が出来るでせうか？ 妾はあなたも御存知の通り氣が強くて、偏見なんかちよつとも持たない方ですから、タチアーナにも始終さう教へてありまして、あの子も氣だけは自由な……」

「伯母さん！」と次の部屋からタチアーナの聲が呼んだ。

「けれども人が約束を守るのは義務ですからね、グリゴリー・ミハリツチ、あなたのやうな、妾のやうな主義の者にはことに左様なんです。若し義務を認めなかつたら妾たちに後に何が残りますか？ 一時の出来心から相手の事も考へないで約束を破るなんてことは出来るもんぢやありません！ あまり無定見です……さうですとも、罪ですよ。間違つた自由ですよ！」

「伯母さん、ちよつと来て下さいな」とまた聲がした。

「今行くよ、今行くよ……」カピトリーナ・マルコウナはリトウイノフの手を握つた。「怒つてゐるでせうね、グリゴリー・ミハリツチ。」……（私が怒つてゐる？）と彼は叫び度かつたのだが舌が動かなかつた。「妾はちつともあなたを怒らせ度くはない……それどころかまるで反對ですよ！ 妾は斯うしてお願ひするのですよ、まだ時はありますからね。あの子を潰してしまはないやうにね、そしてあなたも自分の幸福を毀してしまはないやうに、あの子はまだあなたを信用してゐます。グリーンシヤ、まだ信用してゐますよ。まだ何も取返しがつかぬやうになつてはゐないのです。それどころか、あの子は誰よりもあなたを愛してゐるのですからね！ この嫌なバーデンを立つて一緒に行かうぢやありませんか、たゞあなたが今の迷ひを棄て、そして何よりもあの子を可愛さうだと思つてやつてね、可愛さうだと思つてやつてね——」

「伯母さん！」とタチアーナのやゝ焦れ氣味な聲が聞こえた。

それでもカピトリーナ・マルコウナは彼女の聲には傾けないで、

「たゞよし、」と云つて下さい。さうすれば後は妾が萬事旨く取はからひますからね……たゞ妾にうなづいて見せて下さればそれでいゝのですよ、たゞちよつと斯うして下さるだけでね。」

リトウイノフは今死ぬるものなら喜んで死に度いと思つた。けれども「よし、」と云ふ言葉は云ひもせねば、うなづいて見せもしなかつた。

タチアーナは手紙を手につつて姿を現した。カピトリーナ・マルコウナは突嗟にリトウイノフから飛退いて顔を隠すやうに卓子にのしかゝりながら其の上に戴してある晝附や書類を見る様な風をした。

タチアーナはリトウイノフの方に歩みより、「この手紙です……これを直ぐ局に持つて行つて下さいますか？」

リトウイノフは眼を上げた……眼の前に彼の審判者が立つてゐた。彼女はタチアーナの背のすらりと高いのに胸を打たれる様な氣がした。彼の顔はこれまで見た時より一層美しく輝いてまるで石の彫刻の様な固い莊嚴さがあつて、其の胸は波打ちもせず、其の希臘のカイトンの様な眞つすぐい一色の衣裳は大理石の掛布の様に長い襞を作つて垂れながら足を隠してゐる。タチアーナはリトウイノフに

は眼を呉れないで眞つ正面を見てゐたが其の冷たい、澄み切つた眼差も彫刻の眼差のやうであつた。彼は其の眼差に自分の宣告を読んだ。彼はお辭儀をして、凝と差出した女の手から手紙を受取つて、それから黙つたまゝ此處を出て行つた。

カピトリーナ・マルコウナはタチアーナの方に走り寄つたが、タチアーナは伯母の抱く手を拂ひのけながら眼を伏せた。さつと顔を赧くしたと思ふと、「さあ早い方がよろしい」と云つて自分の寢室に行つた。カピトリーナ・マルコウナも頭を垂れながら其の後に従つた。

タチアーナがリトウイノフに頼んだ手紙は彼女のドレスデンの友達の一人に宛てたもので、それは小さい家具つきの貸間をしてゐる獨逸の婦人であつた。リトウイノフは其の手紙を郵便函に落としたが、彼には此の一片の紙片と共に自分の總ての過去、自分の總ての生活を墓の中に葬るやうに思はれてならなかつた。彼はそれから郊外に出て、長い間葡萄畑の中の小道をぶらついた。彼は夏の蠅が五月蠅く唸る様に執拗にからみつく自己輕蔑の念を何うしても拂ひ除けることが出来なかつた。……彼は先ほどの會見で羨やむに足らぬ役目をしたのだ。……彼が宿に歸つて暫らくして女客のことを尋ねたら、女客は彼が出ると直ぐ停車場に馬車を走らして郵便列車で出發した——何處に向けて出發したのかは解らないと云ふことであつた。荷物の用意や勘定は朝から済ましてあつたのだ、タチアーナが

彼に郵便を持つて行かせたのは邪魔にならぬやうに出したのだと云ふことは疑ふ餘地もなかつた。彼は給仕に女客が手紙でも残して行つたか何うか、思ひ切つて訊ねてみたが、給仕は驚いたやうな顔附をして無いと答へた。一週間の約束で取つた部屋も餘り急に出したものだから給仕も怪訝に思つてゐるらしかつた。リトウイノフは給仕に背を向けて自分の部屋に這入つて錠を卸した。

彼は翌日まで其の部屋を出ないで終夜卓子の前に座りながら書いては破り書いては破りした。……そして東が白みかけた頃にやつと書き終へた——それはイリーナへの手紙であつた

二十三

イリーナへの手紙には斯う書いてあつた。

「私の許嫁の女は昨日出發しました。私たちは二度と逢ふことはないでせう……私はあの女が何處に行つて住むのかさへ知らないほどです。あの女はこれまで私に取つて尊く、望ましかつたものや、私の意志などを一緒に持つて行つてしまひました。私のこれまでの骨折りも今は無駄になりました。私の研究も無意味な用ひどころのないものとなりました。總てが死んでしまひました。過去の私自身も昨日から死んで葬られてしまひました。私にはこのことがはつきり感じられ、見られ、知ることが出

來ます……けれどもそれを残念には思ひません。残念に思ふどころかこれも皆んなあなたの爲にしたことなんです……それは、あなたが愛して下さるときに不足を云ふやうなものです、イリーナ！ 私はたゞこの死んだ過去、煙と灰になつた希望と努力の中にたゞ一つ残つてゐるものはあなたに對する生々した、拒み難い愛であると云ふことを告げたいのです。この愛より他に私には何も残つてゐません。それが私の唯一つの貴いものだと言つても、充分に云ひつくせてはゐます。私はこの愛の中に生きてゐるのです。この愛のみが私の全存在なのです。私の未來も、私の路も、私の天職も、私の國も、皆んなこの中にあるのです！ あなたは私をよく知つてゐます、イリーナ、私は口先を立派に取りつくらうのが嫌ひだといふことはあなたも知つてゐます。そして何れほど私が自分の感情を強ひ言葉に表はしても其れが眞實であつて誇張でないことはあなたも信じて下さるでせう。私は子供のやうに一時の熱に浮かされて無考なことを約束したのではなくて、相當年を取つた男が——單純に平易に、殆ど恐怖を持つて自分が間違ひのない眞理だと思つたことを云つてゐるのです。あなたの愛は私の總てなものを變化さしました——總てのものを、總てのものを？ どうかお考へ下さい。あなたより他の人に私のこの「總てのもの」を任せることが出来るでせうか？ 其の人にあなたをお任せすることが出来るでせうか？ あなた——あなたが其の人の手にあることは私の全存在、私の心臓の血が其の人の

手にあると同じです——そして私は……私は何處にゐるのでせう？ 私は何者でせう？ 局外者……局外者……自分自身の生命を見物してゐる局外者！ いえ、そんなことが出来るものですか！ その物がなくては無益で生きて行けないと云ふ場合にその物を窺かに他人と分ち持つのは……それは欺瞞です、死です！ 私は自分にそれだけの権利もないのに非常に大きな犠牲をあなたに要求してゐるといふことは知つてゐます、また犠牲を要求する権利なんか人間にあるものではありません。けれども私は利己主義からこんな事をするではありません。利己主義者だつたらこんな問題を起す前にもつと易くもつと滑らかに事を運び得る筈です。左様です、私の要求は易しくなく、あなたが驚かれるのも無理はないと思ひます。あなたは上流社會を憎み、嫌で嫌でたまらないと仰つしやいましたが、それを思ひ切つて棄てる事が出来るでせうか？ 皆んながあなたに與へた成功の冠を踏み躪ることが出来るでせうか？ あなたに對するいろ／＼の噂——あの憎むべき人たちの噂を起すことが出来るでせうか？ 自分で考へて下さい、イリーナ、そして自分で持ち切れぬほどの重荷をお持ちにならぬでもいゝでせう。私はあなたを責めはしませんが、あなたは一度その誘惑に負けたことを思ひ出して下さい。私はあなたが失なふものに対して與へ得るものゝ少ないのを悲しみます。最後に申し上げますが、若しあなたが明日でも今日でも總てを放擲して私について來て下さらぬなら——私がどん

なに大膽に腹臆なく申上げてゐるか見て下さい——若し未來の不確實を心配し、人々の噂や孤獨を怖れなさいますなら、若し私に充分信頼することが出来ませぬなら、どうか直ぐ正直に左様仰つしやつて下さい。私は一人行きます。私は破れた胸を抱いて行くでせうがあなたの卒直は祝福するでせう。けれども若し本當に我が美しい、輝かしい女王が、私の様なつまらない憐れな男を愛して下さい、本當に運命を共にしようと思つて下さるならそれなら——私に手を下さい、二人で一緒に困難な道に旅立ちませう！ たゞ總てが無に拘らず私の決心の變らないことだけは信じて下さい。それは理由のないことです……けれども他に私の方法はないのです——あるものですか、イリーナー！ 私はあなたをそれほど深く愛してゐるのです。——あなたの G、L、L」

リトウイノフは自分でこの手紙を餘り好まなかつた。彼が云ひ度いと思つてゐることが此の手紙には眞實に正確に出てゐないのだ。拙い云ひ表し方や、仰々しい言葉や、鹿爪らしい文句などに満ちたこの手紙は彼が破り棄てた澤山の手紙より決して上出来とは云へなかつた。けれどもこれが兎に角一番最後に書いた手紙で、且つ必要な點だけは述べてもあるし、それにリトウイノフは當惑して、疲勞して、これより他に自分の頭から何物をも引き出すことが出来なかつたのだ。其の上彼は自分の考へを文學的の様式に配列する能力は持たないで、こんな事に馴れない人たちと同様に、彼は文章に非常

な困難を感じた。恐らく彼が一番初めに書いた手紙が一番良かつたどらう、心から出たまゝの温か味を持つてゐたから。其れはさて置きリトウイノフは此の手紙をイリーナーに送つた。

彼女は短かい手紙で答へた。

「今日来て下さい、「あの人」は一日留守です、お手紙の趣きには非常に困つてゐます。妾は考へに考へて……頭はまるで渦が巻いてゐる様です。妾はみじめですがあなたが愛して下さいますので幸福です。来て下さい。あなたの I、L」

リトウイノフが這入つて来た時には彼女が自分の居間に座つてゐた。彼を案内した娘は何時か彼を梯子段の處に待受けて見張つてゐたことのある十三の娘であつた。イリーナーの前には卓子の上には半圓形のレースの厚紙の箱が蓋を開けたまゝ置いてあつたが、彼女は片手で何の氣もなく其のレースをつゝきながら、片手にはリトウイノフの手紙を持つてゐた。今しがたまで泣いてゐたものと見えて睫毛は濡れ、眼瞼は腫れ、拭はない涙の跡が兩頬に残つてゐた。リトウイノフは戸口に立塞がつたが、女はまだ氣が附かないらしい。

「泣いてゐらつしやるの？」と彼は怪訝らしく訊ねた。

彼女は吃驚して手で髪を撫でながらにつこりした。

「何うして泣いてゐらつしやるの？」とリトウイノフが繰返した。彼女は黙つたまゝ、手紙を指差した。「それで……それで……何ですか。」と彼は口呟つた。

「さあ、此處にお坐りなさい。お手を下さい。えゝ、妾泣いてゐました……何をあなたはそんなに吃驚してゐらつしやるの！これが何でもない事でせうか？」と彼女はまた手紙を示した。

リトウイノフは腰を卸した。

「そりや容易い事でないとは私も知つてゐますよ、イリーナ、手紙にもさう書いたほどです……あなたの境遇は私も知つてゐます。けれども若しあなたが、私に對する愛の價値を信じてゐらつしやるなら、若し私の言葉を信じて下さるなら、私が今あなたの涙を見て何う感じるか位はあなたにもお解りだと思ひます。私は審判を受けるやうな心持で此處まで遣つて來ました。何んな宣告を受けるか待つてゐるのです。死か生か？ あなたの御返事で何事も定まるのです。たゞそんな眼附で私を見ることだけは止して下さい……そんな眼附をされると何だか莫斯科時代に見た眼附を思ひ出しますから。」

イリーナは自分でも其の眼差に或る悪い影があるのに氣が附いたやうに赧くなつて顔を素向けた。

「何うしてそんな事を仰つしやるのです、グリゴリー？ まあ！ 妾の返事が聞き度いのですか……妾をお疑ひになつてゐらつしやるのですか？ あなたは妾の涙を見て困つてゐらつしやるが——妾が

何故泣くかお解りにならないのです。お手紙をみてつくづく思案しました。此處に妾の愛が萬事を變らしてあなたの御研究なさつたことまで無駄になつたと書いてありますが、男と云ふものは愛だけに生きて行くものでせうか妾は不思議に思ふのです、何時かは愛に飽いて、實際的の生活がしたくなつて、其の人を實際的の生活から遠ざけたものを、恨む時は來ないでせうか？ 妾はそれが心配なんです。それが氣になるのです。何もあなたが想像なさるやうなことで泣いてゐるんぢやありません。」

リトウイノフは凝とイリーナを見詰めた。イリーナも彼を見詰めた、さながら二人とも言葉のとゞき得るところ、言葉の裏切り得るところより最つと／＼深い相手の魂の底を見抜かうとでもしてゐるやうに。

「そんな事を心配なさるのは間違ひですよ、」とリトウイノフが云つた、「私の書き方が悪かつたのです。疲勞？ 無性？ そんなものをあなたの愛が與へるでせうか？ イリーナ、あなたの愛の中には全世界があつて、其の中から私の爲に何んな物が發展して來るか解らないのですよ。」

イリーナは考へてゐたが、

「何處へ行くのですか？」と囁いた。

「何處つて？ そりや後で話しませう。それよりも、ぢや、あなたは……同意して下さいるのですか？

同意して下さるのですか、イリーナ？」

女は彼も見ながら、「あなたはそれで幸福でせうか？」と訊ねた。

「おゝ、イリーナ！」

「後悔なさるやうなことはありませんか？ 些つともありませんか？」

彼女はまた原紙の箱の上に屈んで其の中に這入つてゐるレースを眺めた。

「何卒悪く思はないで下さいね、あなた、斯んな時にこんなつまらない事に氣をかけますなんて……或る家の夜會に行かなくちやなりませんので、斯んな飾りを送つて寄越したものですから、今日行かなくちやなりませんの。あゝ！ 本當に困つてしまひました」かう云ひながら急に泣き出して箱の縁に顔を凭せかけた。眼からはまた涙が流れた……涙でレースを汚さないやうに顔を素向けた。

「イリーナ、またお泣きになるのですね、」とリトウイノフは不安げに云つた。

「えゝ、また、」とイリーナは口早やに云つた。「グリゴリー、妾を苦しめないで下さい。またあなた御自身を苦めない方がよろしい……妾たちは自由な人間です！ 泣いたつていゝぢやありませんか！ また妾だつて何故こんなに泣くのか自分でも知つてゐます。あなたも妾の決心はよく知つてゐらつしやつて、妾の心の變らない事は信じてゐらつしやいます。それは妾だつて同意してゐます……何と仰

つしやいましたかね？ 總てが無か……其の上欲しいのです？ 二人は自由になりませう！ 何うしつてお互に鎖で縛りつけるのです？ 妾たちは今二人きりで、あなたは妾を愛して下さいませ。妾はあなたを愛してゐます。妾たちには相手の考へを絞り合ふより他にする事がないのでせうか？ 妾を御覽なさい。妾は自分の事を云ふのは好みませんが、妾は一度だつて自分が妻としての義務を棄てるのは難かしいなどと仄めかした事はございません——そして、無論、自分を欺いてはゐません。妾は自分が罪人だことは知つてゐます。そして「あの人」には妾を殺す権利のあることも知つてゐます。ですけど其れが何です？ 妾たちは自由になりませう。今日は妾たちのものです——一生は妾たちのものです。」

彼女は胸椅子から身を起こして立上り頭を後ろに投出して眉を動かさず微笑しながらリトウイノフを見て、肘の邊まで皮膚を現した手を上げて顔に垂れかゝる涙に濡れた長い亂髪を後ろに拂つた。蒼澤なスカーフが卓子から滑つて足元に落するとイリーナは輕蔑する様にそれを踏み躪つた。

「それとも今日は妾を愛して下さいませんか？ 昨日より醜くなりましたか？ あなた最つと美しい手を御覽になつたことが、度々ありますか？ これからこの髪は？ ねえあなた妾を愛して下さいませか？」

かう云つて女は彼を両手で抱いて、其の顔をしっかりと自分の胸に押しつけた。櫛がカチンと音をさして落ちると亂れた髪が彼の上にこぼれて其の好い匂ひで彼を包むのであつた。

二十四

リトウイノフは頭を垂れて深い思ひに沈みながら、旅館の自分の部屋の内を往つたり來つたりしてゐた。彼は今は理論から實際に移つて見知らぬ國に飛び出す工夫をしなければならなかつた……けれども不思議なことには、彼は其の方法や手段を考へるよりも、實際疑ひもなく其の決心が自分が執拗に主張した所まで來てゐるだらうかといふ事を考へてゐた。最後の取返しのつかぬ言葉は云はれたのだらうか？ けれどもイリーナは別れる時に確に彼にかう云つた、「實行なさい、實行なさい、そして何もかも用意が出來た時に、妾に知らして下さい。」これが最終の言葉ではないか！ 最う疑ふまい——實行に取かゝらねばならぬ。リトウイノフはかう思ひながら費用を計算してみた。何よりも金が第一である。考へてみると彼は實際千三百二十八グルデン、佛蘭西の金に直して二千八百五十五フラン持つてゐた。大した金でもないが、差當り入用な額としては充分であつた。それにまた直ぐ父に出来るだけの送金を頼めばいゝ。國にある林を賣ればいゝ。何んな口實で？ なあに、口實は幾らもあるだらう。イリーナは寶石の事を話してゐたがあんなものは何んな事があるかも知れないから其の時の用心に今勘定しない方がいゝ。彼は立派なゼネワの時計を持つてゐるが、それで……左様、多分四百フランは出来るだらう。リトウイノフは銀行へ行つて遠廻しに若し必要な場合には金が借れるか何うかと訊ねてみたがバーデンの銀行家は意地の悪い古狐だからこんな遠廻しの質問に對して直ぐ鎌で切られた野の花の様に萎れた風をする。人によると面と向つて冗談の様に笑つてしまふほどだ。リトウイノフはルーレットで運を試してみようと、恥かしさを忍びつゝ自分の年齢と同じ三十番で一タレルを賭けてみた。かうして段々資本を増して行かうと思つたのだ。そして若しそれで増すことが出来なければ二十八グルデンのはしたを失ふことになるのだ。第二の問題は、これも可なり重大なことだが、旅行券だ。尤も女には旅行券は無くしてはならぬと云ふではないし、それに白耳義や英吉利の様に少しも旅行券の必要のない國もある。それにまた露西亞でない他の旅行券を貰ふことも出来る。リトウイノフはこれらの事をごく眞面目に考へてみた。彼の決心は頗る固く、少しもぐらつかなかつたが、何だか考へまいとしても不眞面目な、殆ど可笑しいほどの或る感じが冥想の中に濾子で濾したやうに泌み込んで來るのを拒むわけには行かなかつた。そして此の計畫が如何にも滑稽的で、墮落なんてことはたゞ芝居や小説にのみあることで、本當の世間にはあるものではないと思はれた。そして或る遠

かう云つて女は彼を両手で抱いて、其の顔をしっかりと自分の胸に押しつけた。櫛がカチンと音をさして落ちると亂れた髪が彼の上にこぼれて其の好い匂ひで彼を包むのであつた。

い國の何時も倦怠に困つてゐる人たちが斯んなこともすると云ふ旅人の話を思ひ出した。此處まで考へて來た時、リトウイノフは自分の知人の休職騎兵士官のバツオフが商人の娘と三頭桶に乗つて駈落したことを思ひ出した。この男は駈落する前に娘や娘の兩親を酔はして置いたものだが直ぐばれてしまつて元の通りに歸されてしまつた。リトウイノフは斯んな事を取り止めもなく思ひ出しては新たな不安に襲はれるのであつた。それからタチアーナのこと、彼女の不意の出發、その悲しみと苦痛と恥かしさ、それから自分がこれから仕ようとしてゐる事は非常に大變なことで、自分がイリーナに自分の名譽に對しても是れより他には方法がないと云つたのは本當であることなど考へた——そしてたゞイリーナの名を考へただけで何か或る炎の様なものが自分の胸に快い痛みを與へて掠めさせるのを感じた。

馬の蹄の音がカッ／＼と後ろの方から聞こえて來た——彼は路をよけた……馬に乗つたイリーナが彼を追越した。彼女は肥えた將軍と馬を並べてゐた。リトウイノフを認めると彼女はちよつとうなづいて見せて、それから馬の横腹に一鞭くれたかと思ふと馬は藜地に駈け出した。女の黒い面布が風になびUP……

「Pas si vite ! Nom de Dieu ! pas si vite !」かう喚きながら將軍も女の後を追つて駈け出した。

二十五

翌日リトウイノフが銀行へ行つて自分の國の爲替相場の変動し易いことや、外國に送金する一番いゝ方々など話した後で旅館に歸ると、門番が彼に手紙を渡した。見ればイリーナの字だ。彼は封を切らない中に何故だか知らないが悪い豫感を感じた。彼は自分の部屋に歸つた。手紙には佛蘭西語で斯う書いてあつた

「妾の愛する人よ、妾は一晚あなたの計謀を考へつゞけました——妾は最うまぎららしい事は申しません。あなたも正直に仰つしやいましたから妾も正直に申し上げます。妾はあなたと一緒に逃げ出すとは出来ません。妾にはそんな力はありません。ほんとにあなたに對して濟みませんです。妾の二度目の罪は初めの罪より大きく、妾は自分で自分を憎み輕蔑し責めますが、自分を變へることは出来ません。妾は今あなたの幸福を毀したことを、あなたが妾をつまらない浮氣女と仰つしやつてもそれが當り前なこと、それから妾があなたを引つぱつたり、眞面目な約束をしたりしたことをいろ／＼考へては見ましたが、何うすることも出来ませんでした——妾は怖ろしさに一杯になつて、自分が嫌でたまらないのですが、何うすることも出来ません。何うすることも出来ません。妾は自分の方に理窟があ

ると云つたり、自分が思ふ通りにならぬと云つたりはしません……そんな事は何うでもいゝのです。ただ申上げ度いことは、繰返し繰返し申上げ度いことは、妾が永遠にあなたのものであつて、あなたがお好きな時にお好きな様になさつていゝと云ふ事です。義務や責任に縛られないで！ 妾はあなたのものです。……けれども逃げ出す、總てを投げ出す……それは出来ません！ 妾は救ふて下さいとあなたに頼み、何もかも過去のものは焼き棄てゝくれと頼みました……けれども妾はとても救はれる望みのない女です。最う毒が仕様のないほど深くめぐつてゐるのです。此の社會にゐては誰でも穢れずにはゐられないのです。妾はあなたの思惑を踏つて長い間この手紙を出さうか出すまいかと迷ひましたが、たゞあなたの妾に對する愛に縋ることにしました。そして妾は本當を隠すのは不正直だと思ひました——ことにあなたが計畫を實行なさらうとしてゐらつしやるのですから。あゝ！ それは嬉しい事ではありませんが、とても出来ないことです！ おゝ、愛する人よ、妾を弱い、價値のない女だと輕蔑なさるのは構ひませんが、どうか妾を見棄てることだけはしないで下さい、どうかあなたのイリーナを見棄てないで下さい！……妾はこの世を去る元氣もありませんが、あなた無しにこの世に生きることも出来ません。妾たちは間もなくベテルブルグに歸りますからあなたもおいでなさいまし。妾たちはあなたが今まで研究なされた事が使へる様な好い仕事を見つけて上げませう……たゞ妾のそ

ばに住んで下さい、たゞ妾を愛して下さい。弱いところや缺點のある女として愛して下さい。そしてあなたのイリーナほど優しい愛をあなたに捧げる女は他にないと云ふことを信じて下さい。直ぐ來て下さい、あなたにお目にかゝるまでは心配でたまりませんから。 あなたのイリーナ。」

血が髓で叩く様にリトウイノフの頭に上つたかと思ふと次第にそれが苦しく胸に歸つて終には石の様に冷たくなつた。イリーナの手紙を読み終ると莫斯科の時のやうに力なく長椅子に倒れかゝつて身動きもしなかつた。不意に眞つ暗い淵が周圍を取かこんで彼は其の黒い口を茫然と見詰めてゐるやうな氣がした。斯うしてまた、また欺き、いや、欺きより最つと悪い、嘘と卑劣を見たのだ——そして生中が碎け總てのものが根こぎにされて、たゞ一つの縋り得るもの——たゞ一つの頼みと思つてゐたものは今は無くなつてしまつたのだ！「あなたもベテルブルグにおいでなさい、」と彼は心の中に苦笑ひしながら繰返してみた。妾たちが仕事を見つけて上げる——、書記長の位置でも見つけて呉れるのか？ また「妾たち」とは一體誰のことだ！ あの女の過去の暗示が斯んな處に現れてゐる。他人には解らないがあの女が拭ひ去らうとし、火で焼きつくさうとしてゐる過去の怖ろしい秘密が現れてゐる。此處に陰謀や、秘密の關係や、ピエルスキーやドルスキーの恥づかしい話が隠れてゐるのだ——そして何と云ふ未來、何と云ふ滑稽な役目が自分を待つてゐるのだらう！ あの女の近くに住み、あ

の女を訪問し、世間に退屈しながらもそれから逃れることの出来ない社交界の女の病的な憂鬱の相手をして云ふまでもなく其の家、其の主人の將軍の友達となる——そしてそして終ひには女の出来心が變つて平民の戀人に興味を失なつて、あの肥えた將軍やフィニコウと代へられる——成る程これは面白い、いゝ事だ——あの女は自分の才能を有益に使ふことを話した：：けれども最一つの計畫は實行できないのだ。實行できないのだ。：：リトウイノフの心には嵐の前の不意の大風の様な忿怒が起つた：：手紙の中のイリーナの文句はどれもこれも癪に觸つて、永久に心が變らぬと書いた文句まで不愉快に思はれた。そしてとう／＼斯う云つた、「このまゝにしちや置かれない、己れの生命をこんなに無慈悲に弄ばれたまゝ黙つてはゐられない。」

リトウイノフは飛び上つて帽子を取つた。然し彼は何うするのだらう？ 彼女の處に行くのか？ 彼女の手紙の返事をするのか？ 彼はまた立止まつて両手を垂れた。

「左様だ、何うしたらいいだらう？」

この大切な選擇を彼女にまかしたのは彼自身ではないか？ 彼は斯んな結果にならうとは思はなかつた：：選擇には何時でもこの危険は伴ふものだ。彼女が心變りをしたのは事實だ。彼女が始めに總てを棄て、彼に従ふと斷言したのも事實だ。けれども彼女は自分の罪は担まなないで、自分を弱い女

だと云つてゐる。彼を欺かうとはしないで自分で欺かれたのだ。——それに對して彼は何と答へるべきだらう？ 少なくとも彼女は偽善者ではない、彼を欺いたのではない——正直なのだ、悔ゆるところのないほど正直なのだ。何も他から彼女を正直に打明けるやうに強ひたものはないのだ。彼を約束で宥めながらいゝ加減にごまかして彼女の出發間際まで曖昧にして置かうと思へば左様にもなつたのだ：：彼女の良夫と伊太利に出發する間際まで。けれども彼女は彼の生命を破壊した。二人の生命を破壊した：：それを何うする？

けれどもタチアーナは何の咎もないのだ。咎は彼、リトウイノフにのみあるのだ。自分が自分に勝手に加へた鐵の腕の責任を振落す權利は彼には無いのだ：：それは左様だが、今後どうしたらいいのだらう？

また彼は長椅子の上に跳ね起きた。そしてまた憂鬱と暗黒と朦朧のうちに貪るやうな速さで時間は跡も残さず過ぎて行つた：：

「然しどうしてあの女の言葉に従へないだらう？」と云ふ考が彼の頭を掠めた。「あの女は己れを愛してゐて、己れのものなんだ。そして二人がお互に愛し合ふその愛情の中には、長い間の後に燃え上つて斯んな烈しい焔となつた二人の愛情の中には、何か避け難い、拒み難い自然の法則の様なものは無

いだらうか？ ベテルブルグに住む……そして己れは斯んな位地につく最初の人となるのか？ だが二人一緒にゐて安全だらうか？……」

彼はまた冥想に陥つた。そして彼の此頃の記憶にはつきり刻みつけられたイリーナの面影が靜かに彼の眼の前に現れて來た……がそれも僅かの間……彼は氣を取直し、新しく湧上つた忿怒でこれらの記憶も誘惑的な面影も綺麗に追拂つてしまつた。

「お前はあの黄金の杯で己れに飲ませようとした」と彼が叫んだ。「けれども其の中には毒があつて、お前の白い羽は、泥で穢れてゐる……彼方へ行け！ 許嫁の女を追歸した後に……お前と共に残るのか……面目ない事だ、面目ない事だ！」彼は狂憤に手を揉んだ。深い處から他の女の靜かな顔に苦痛の色を浮べて別れを告げる眼差に無言の叱責をたゞへた幻が現れて來た……

斯うしてリトウイノフは長い間悩し續けた。長い間、彼は熱病の人の様に苦悶の爲に隅から隅へと弄ばれてゐた……けれども纏て平穩に鎮まつて彼の心に或る決心がついた。彼は初めからこの決心の像感を持つてゐたのだ。……初めにはその決心が闇と内的紛亂の眞ん中に遠く幽かな點の様に見えてゐたのが、それが段々近づいて來てとう／＼其の氷の様な刃で彼の心に切り込んで來たのだ。

リトウイノフはまた部屋の隅から荷物を引出して、また荷造りを始めた。別に急ぐでもなく、却つ

て一種のぼんやりした香氣さで、呼鈴を鳴らして給仕を呼び、勘定すました後で露西亞語で次の様な意味を認めてイリーナに持つて行かせた。

「あの時より今度の方があなたの遣り方が酷いかどうかそんな事は解りませんが、たゞ今度の打撃が限りなく烈いものなことだけは知つてゐます——これで何もかもお終ひです。あなたは『妾は出來ません』と仰つしやいましたが、私もあなたの御希望通りのことは『出來ません』とお答へいたします。私は出來もしなければ仕度くもないのです。この手紙に御返事は要りません。あなたは私が受け入れることの出来る唯一つの返事を書くことは出來ますまい。私は明日の朝早く一番列車で立ちます。左様なら、御機嫌よろしう！ 二人はどんな事があつても二度と逢ふことはないでせう。」

夜が更けるまでリトウイノフは自分の部屋を出なかつた。何かを待受けてゐたのかどうか、それは解らない。夜の七時頃黒い外套を着て面布で顔を隠した一人の婦人が彼の旅館の入口に二度ばかり近づいた。少し傍によつて遠方を眺めた後、彼女は決心した様な手つきをして三度目に入口の方に近づいた……

「何處にいらつしやるのですか、イリーナ・パウロウナ？」と云ふ力の入つた聲が彼女の後ろの方で聞こえた。

彼女は神經質らしく突嗟に振向いた——パツギンが彼女のそばに走りよつた。

彼女は立止まつてちよつと考へた後、彼の方に倒れる様に近づいて彼女の腕を取つて引つばつた。

「彼方に連れて行つて下さい、彼方に連れて行つて下さい、」と彼女は息もつかずに繰返した。

「どうなさつたのです、イリーナ・パウロウナ？」と彼は當惑して訊ねた。

「連れて行つて下さい、」と彼女は一層力を込めて繰返した、「若し永久に妾が——さあ。」

パツギンは同意するやうにうなづき、二人は一緒に急いで立去つた。

習日の朝早くリトウイノフがすつかり旅行の用意を済してゐた時——彼の部屋に——パツギンが這入つて來た。

彼は黙つてリトウイノフに近づき、黙つて握手をした。リトウイノフも一言も云はなかつた。二人とも物悲しさうな顔をしてゐて笑はうとしても駄目であつた。

「お別れに参りました。」とパツギンが暫くして云つた。

「何うして私が今日立つことが解りました？」とリトウイノフが訊ねた。

パツギンは床をじろく見廻してゐた——「それが私には解つたのです——御覽の通りに。こないだは妙な別れ方をしましたが——私は君に對する好感を表はさずにこのまゝお別れする譯には参り

ませんので。」

「君は私に對して好感を持つてゐらつしやるのですか——私が出発しようとしてゐる時になつて？」

パツギンは悲しさうにリトウイノフを眺めながら、「あゝ、グリゴリー・ミハリツチ、グリゴリー・ミハリツチ、」と云つて短かい溜息をついて、「今はそんな事を云つてゐる場合ぢやありません。そんな小さい事を議論してゐる場合ぢやありません。私の見た處では君は我が國の文學にあまり興味を持つてゐらつしやらぬやうですから、多分ワスカ・プスラーエフの事はよく御存知ないでせうね？」

「誰の事ですか？」

「ワスカ・プスラーエフの事です。ノウゴロドの勇者です——キルシュ・ダニロフ全集の中の。」

「プスラーエフ？」とリトウイノフは話が妙な方面に飛んだので少々慌て氣味で、「知りませんね。」

「なあに、御存知なくても結構なんですよ。たゞ私は或る事に君の注意を引き度いと思ふのです。ワスカ・プスラーエフは彼のノウゴロド人を、エルサレムの巡禮に連れて行つた時に、皆んなが怖れるのも構はず裸にしてヨルダン河の聖い水に浴びさせたのです。それは彼が「前兆も、夢も、鳥が飛ぶ」のも信じなかつたからです。この論理的のワスカ・プスラーエフが、タボルの山に登りましたが、其の山の頂には大きな石があつて、いろくの人々が其の石を飛び越さうとしても駄目なのです。——ワス

「かも自分の運命を試してみやうとしました。彼は山に登る途中で人間の獨體に出會つてそれを蹴飛ばしたのです。そこで獨體がその人に云ひました、「何故己れを蹴るんだ？ 己れは何んなに生きるべきかを知つてゐたが、今は何んなに塵の中に轉んでゐるべきかを知つてゐる——お前も聽ては斯うなるのだぞ。」實際ワスカは石を立派に飛越したが蹴つまづいて頭蓋骨を碎きました。此處で私は一口云ひ度いのですが、死んだ頭蓋骨や腐れかゝつた國體を足の下に踏みつけて喜んでゐる國粹主義者は此の傳説を一應考へてみる必要があると思ひますね。」

「然し一體それは何ういふ意味なんです？」とリトウイノフは堪らなくなつて訊ねた。「失禮ですが最う時間ですから——」

「なあに、これは、」とリトウイノフは答へたが彼の兩臉はリトウイノフでさへ意外に思ふほどの優しい温かさで輝いた。「これは、君が死んだ人の頭蓋骨を蹴らないやうにね、そして旨く君が大切な石を飛越しますやうにと思ひましてね、長くお邪魔はいたしません、たゞ別れに臨んで抱かせて下さい。」
「私はそれを飛越してみようとも思つちやゐないのです。」と云つてリトウイノフは三度パツギンを接吻したが彼の心を満たしてゐた辛い感じは、ひとしきり此の可愛さうな寂しい人に對する憐れみの情に代つた。

「然し私は行かなくちやならない、行かなくちやならない……」かう云ひながら彼は部屋の内を歩き廻つた。

「何か持つて行つて上げませうか」とパツギンが申出た。

「いえ、有難う、なあに、大丈夫です……」

彼は帽子を冠つて靴を取上げた。そして部屋の入口に立塞りながら、「ちや君はあの人に逢つたのですね？」と訊ねた。

「えゝ、逢ひました。」

「さう……何んな様子でした？」

パツギンは暫く黙つてゐた。「あの人は昨日君が来るのを待つておりましたよ——今日も待つてゐるでせう。」

「あゝ——ちやねえ、斯う云つて下さい——いや、云はんでもいゝ、何も云はんでもいゝ。左様なら——左様なら——左様なら！」

「グリゴリー・ミハリツチ——最う一つ言はして下さい。まだ私の話を聞く時間がありますよ、汽車が出るまでにまだ三十分以上あるのですからね、君は露西亞にお歸りになつて——其處で——やがて

仕事をなさる——この饒舌家に——實際私は饒舌家だけの男なんですからね——この饒舌家に君の旅行に當つて忠告をさして下さい。何か仕事をなさる時には自分で斯う訊ねてみるのです、自分は文字通りの意味に於て文明の進歩に盡してゐるだらうか、文明の理想を何か發展させてゐるだらうか、自分の努力は現代の我々の間に有益な歐化主義的の性質を持つたものだらうか？ と斯う考へてみるのです。若し左様だつたら大膽にお進みなさい。君は正しい道を歩いてゐるので、君の仕事は祝福されてゐます！ 有難いことには今は君一人ぢやないのです。「砂漠に種を蒔く人」にならんでもいいのです。澤山の働く人がゐます——先驅者もゐます——今私たちの間にさへ——しかし君は今が斯んな事を聞く氣にはなれません。左様なら、私を忘れないで下さい！」

リトウイノフは飛ぶやうに梯子段を降りて、馬車に駆け込み、いろ／＼な思ひ出の残る其の町を一度も振向きもせず停車場に向つた。彼は謂はゞ潮に身を任せたるやうなもの、潮の運び去るにまかせて、決してそれに逆ふまいと彼は固く決心したのだ——それ以外に自分で獨立して動くことは決してすまいと決心したのだ。

彼が汽車に乗り込まうとしてゐると、

「グリゴリー・ミハリツチ、グリゴリー……」と後ろの方で哀願するやうな囁きが聞こえた。

彼は吃驚して立止まつた——イリーナだらうか？ 左様だ、イリーナだつたのだ。女中のシヨールにくるまつて亂れた髪に旅行帽を冠つた彼女は、プラットホームに佇みながら疲勞したやうな力ない眼差で彼を眺めてゐた。

その眼差は、「歸つて下さい、歸つて下さい、妾迎ひに参りました」と言つてゐるやうに見えた。何んな要求でも容れるやうに見えた。彼女は身動きすらしない、言葉を云ふ力さへない、身のまはりの體てのもの、其のしどけない着物の着方さへ彼の許しを哀願してゐるやうに見えた——

リトウイノフは其の有様に打たれざるを得なかつた。最少しのことでは彼女のそばに走り寄るところだつたけれども彼が身を任せた潮の熱情は強かつた——彼は車室に飛込んで、振返りながらイリーナを自分の隣に腰かけるやうに手招きした。女は彼の意を讀んだ。時間はまだあつた。ほんの一足。ほんの一動き、それで二つの生命は永劫に一つになつて何處とも知らぬ遙かな遠い處に行くところだつた。——けれども彼女がまだ躊躇つてゐるうちに消魂しい汽笛と共に汽車はしづ／＼と動きだした。

リトウイノフは凭れかゝるやうに腰をかけた。イリーナはよろ／＼と一つの腰掛に走り寄つて其處に倒れた。或る外交官で今は遊んでゐる人が丁度其の時停車場内をぶら／＼歩いてゐたが、是れを見て非常に驚いた。その男は少しはイリーナを知つてゐて、大層彼女を褒めてゐるのだが、今彼女が卒

倒したらしい有様を見て神経の病で倒れたものと思ひ、助けに行くのが自分の un galant chevalier としての義務だと考へたのだ。けれどもそれより尙一層驚いたことには彼が一言女を呼ぶと、女は不意に起上つて彼が差伸べる手を拂ひのけて大急ぎで街に出て、數分間のうちに秋の初めの「黒い森」の地方によくある牛乳色の朝霧の中に姿を隠してしまつた。

二十六

私は曾て非常に可愛がつてゐた息子を失つた或る百姓女の小屋を訪れたことがあつたが、不思議にも其の女がごく落着き拂つて殆ど嬉しさを顔をしてゐるので驚いた。其の時私が驚いたのを見てゐた其の女の良夫は斯う云つた、「仕方がありません、最う感じがなくなつてゐるのですから。」と。リトウイノフもこれと同様、「感じがなくなつてゐる」のだ。すつかり碎かれてしまひ、望みの無いほどじめにはなつてゐるが、それでも尙ほ此の一三週間の間に次から次と彼の頭に加へられた苦痛と心配の後で一種の安らかさを感じてゐるのであつた。斯んな嵐に耐える力のない彼に取りてはその苦痛は一層大きかつたにちがひない。今の彼は何も望まなかつた。何も思ひ出さうとしなかつた。思ひ出すことは特に避けるやうにしてゐた。彼は露西亞に歸りつゝある。

——彼は何處かに行かねばならなかつた。けれども自分として爲すべき計畫は何も考へてはゐなかつた。彼は自分の存在も認めなければ、自分の爲しつゝあることも考へず、自分と他人の區別をすつかり忘れてゐた。そしてまた事實彼は其の區別に何の興味も持つてゐなかつたのだ。或る時には何だか自分が自分の屍を持つて歸りつゝあるやうにも思はれた。そしてたゞ癒しがたい精神の激痛が痙攣の様に體の中を走るので自分はまた生きてゐるのだと云ふ氣持がするのであつた。或る時にはまた、一人の男が——立派な男が——一人の女の爲に、愛の爲に、こんな打撃を受けるといふことを不思議に思つてもみた——「面目ないことだ！」かう呟いて彼は外套を振拂つて居すまひを止すのだつた、さながら澁んだ事は仕方がないから新しく始めようと云つてゐるやうに。——がまた次の瞬間には苦笑しながら自分で自分を不思議に思つてゐた。彼は窓から外を覗いてみた。外は灰色に濕つて、雨こそ無いがまだ朝霧が深く立込めて、空には雲が低く低徊してゐる。汽車の眞向ふから吹きつける風に、蒸氣の雲があるものは白いまゝ、あるものは黒い煙の雲に混つて、リトウイノフの座つてゐる窓の外を限りない列をつくりつゝ流れて行く。彼は凝とこの蒸氣、この煙を見詰めた。斷えず舞ひ上つたり、崩れたり、草や繁みの上に渦を巻いたり、釣の様に纏れたり、丁度おどけて戯れるやうに長く伸びたり、隠れたり、雲また雲と流れて行く——永遠に次から次と變化しながら、而も永遠に短調な、忙が

しい、懶い戯れを続けながら流れて行く！ 時々風が變つて其の列が右に左に揺れたかと思ふと、急にすつかり消えてしまつて、直ぐまた反對の窓に現れる。かと思ふとまた其の巨大な尾が吹き拂はれてまた曠大なラインの平原を見渡すリトウイノフの眼界を遮る。彼はそれを見詰めに見詰めた。彼は不思議な幻想に襲はれた。——其の區別には彼が一人で誰も防げる者がゐなかつた。「煙——煙——」と彼は五六度繰返して云つた。忽ち彼に總てのもの、彼自身、露西亞の生活——人間の總てのもの、特に露西亞の總てのものが皆んな煙のやうに思はれた。何もかも皆煙だと彼は思つた。總てのものが断えず新しい形をして變化し続け、幻から幻と飛んで行くが、事實は相變らず同じものなのだ。總ての物が頻りに何物かを目當てに走つて行く。而も其の跡に何物をも残さず、何物にも達しないで消えて行く。一度風が吹けば總ては反對の方に吹拂はれて其處にまた同じやうな疲れを知らぬ動搖が新たに始まる——無益の跳躍が新たに始まる！ 彼はこの二三年の間に自分の前に回轉せられた様々の騒がしい大層な出来事を思ひ浮べてみた。「煙——煙——」と彼は呟いた。彼はまだグバリョーフの部屋に於ける興奮した議論や、其他の身分の高い人や低い人や、進歩した人や遅れた人や、年を取つた人や、若い人を思ひ浮べてみた「煙だ、」と彼は繰返した。「煙と蒸氣だ、」それからまた流行界の遊山や、其他の政治家の説——バツギンの説教まで残らず思ひ浮べてみた——「煙だ——煙だ、皆んな煙に過ぎないのだ。」そして彼自身蕩擻きと、熱情と、苦痛と、夢は何であらう？ 彼は絶望の身振を以てこれに答へるより他なかつた。

いのだ。」そして彼自身蕩擻きと、熱情と、苦痛と、夢は何であらう？ 彼は絶望の身振を以てこれに答へるより他なかつた。

其の間にも汽車はラスタート、カルルスルーへと、ひたばしりに走つて、今はブルクサルも最う遙か後ろになつてしまつた。右手に列を作つた山々は向きが變つて段々遠くに離れ、また現れるには現れたが前ほど高くもなければ前ほど木が繁つてもゐない——忽ち汽車が鋭く曲がつたと思ふと其處にハイデルベルヒがあつた。列車が停車場の覆ひの下に滑り込むと新聞賣子の騒がしい聲、いろいろな新聞がある。露西亞の新聞さへある。乗客はごとく用意をしてプラットホームに降りやうとしたが。リトウイノフは身動きもしないで俯向いてゐた。と、不意に誰か彼の名を呼ぶので眼を上げて見た。ピンダソフの醜い顔が窓から覗き込んでゐる。ピンダソフの後ろには——それとも彼が夢見てゐるのだらうか、否、本當に——總てのバーデンの親しい顔が見えた。スハンチコフ夫人がゐる、ウオロシロフがゐる、ムムベエフがゐる、彼等は皆んなリトウイノフの方に寄つてたかつた。ピンダソフは奴鳴つた。

「だがピシユチャルキンは何處にゐるんだらう？ あの人を待つてゐるんだが。しかし何でもいゝ。出たまへ。皆んなで是れからグバリョーフの家に行くんだ。」

「さうだよ君、プバリョーフが待つてゐるんだ。」とバムベエフも相槌を打ちながら彼の爲に道を開けてやつて、「出たまへ。」

リトウイノフの胸の中に若し此の時死んだ様な重荷が横たはつてゐなかつたら、彼は腹を立てゝ怒り出しただらう。彼はビンダソフに眼を呉れた後、黙つたまゝ顔を素向けた。

「グバリョーフが此處にゐらしやると云ふのに、」とスハンチコフ夫人が眼を頭から抜け出させるやうにして叫んだ。

リトウイノフは顔の筋一つ動かさなかつた。

「まあ聞きまたまへ、リトウイノフ、」とバムベエフが云つた。「グバリョーフたけぢやないんだ、露西亞の最も優れた、最も賢い青年たちが皆んな揃つて、皆んな高尚な自信を持つて自然化學を研究してゐるんだ！ それだけでも君が此處に降りなけりやならぬ筈ぢやないか。例へば此處には——それ、何とか云ふ人だつた——名前を忘れたがあの人には天才だ！ 全く？」

「お止しなさい、バムベエフ、」とスハンチコフ夫人が口を入れた。「お止しなさい、あの方はあんな人なんです、あの人の家族も皆んなあんなのです。あの人の伯母は初めには大變面白い人だと思つてゐたのですが、一昨日此處で逢ひましたが——あの方はたつた此の間パーデンに行つたのに、まだ見物し

ない中に歸つてしまつたのです——で、妾が逢ひに行つていろく訊ねてみました——ところが何うだと思ひます、あの方は固くなつて一口も返事をしないのですよ。怖ろしい貴族！」

可愛さうにカピトリーナ・マルコウナが貴族！ 彼女が、こんな侮辱を受けると思つてゐただらうか？

けれどもリトウイノフは矢張り身動きもしなかつた。顔を素向けたまゝ帽子を眼深に冠り直した。轆て汽車は動き出した。

「おい、別れに一口でも何とも云ひたまへ、まるで石のやうな男だ！」とバムベエフが叫んだ。「餘り非道すぎる！」

「腐つたにやけ男！」とビンダソフが奴怒つた。次第に汽車が速度を早めて動きだすと彼は無遠慮に罵ることが出来た。

「泥の中の吝嗇棒」

この文句はビンダソフが即座に發明したのか、それとも人から聞いたのか知らないが、此時傍に立つてゐた自然科學を研究して二人の貴族の青年を非常に満足させたらしく、數日たつと當時ハイデルベルヒで發行してゐた *A tout venant je crache!* または「他人の事は知らない、」と云ふ露西亞の定

期刊行物にその事が出てゐた。

けれどもリトウイノフはまた思つた、「煙だ、煙だ、煙だ！ 今でこそハイデルベルヒに百人以上の露西亞の學生がゐて化學や、物理學や、生理學を勉強してゐて、他の事には耳も貸せないほどだが、これが五六年たてば同じ有名な教授たちの講議に十五人とは出なくなるだらう。風は變つて、煙は吹き散らされて——他處に行くだらう……煙だ……煙だ……」

暮れ方に彼はカッセルを通過した。暗くなるとともに堪へがたい悲痛が鷲のやうに襲つて来て、車室の隅に顔を埋めてしくしくと泣いた。何時までたつても何時までたつても涙は止め度もなく湧いて来て心は鎮まるどころか、喰ひ入る様な苦痛にさいなまれるのであつた。丁度この時カッセルのとある旅館の一室にはタチアーナガ熱病の床に横たはつてゐた。

カピトリーナ・マルコウナはその傍に座つてゐた。

「ターニア、お願いだからグリゴリー・ミハリツチに電報打たしておくれ、ね、ターニア！」

「いゝえ、伯母さんいけません、心配ありませんよ、水を飲まして下さいな、直ぐ癒りますから。」

一週間たつとその言葉通りよくなつて、二人の連れはまた旅を續けた。

二十七

リトウイノフはペテルブルグにも莫斯科にも寄らずに故郷に歸つた。弱くなつて老耄れてゐる父を見た時には彼もがつかりした。老人は息子の歸つたのを限りなく喜んだ。餘命の長くない人として喜び得るだけ喜んだ。そして何もかも彼に任せ、崩れかゝつた物の整理を云ひつけた後、三三週間生きながらへて此の地上を去つた。リトウイノフはたゞ一人この古い小さい農家に残されて、希望も熱も金もなく、重い心を持つて土地の仕事に取りかゝつた。土地の仕事が何んなに無趣味なものであるかは人のよく知つてゐるところであるから、此處に長たらくリトウイノフが感じた、あじきなさを書くことは止めよう。改革や新しい企てには無論問題がなかつた。彼が外國にゐる時に集めた智識の應用は無期限に延ばされた。彼は貧乏の爲に毎日方針を變へ、總ての妥協をしなければならなかつた——物質的にも。道徳的にも新しいものには故障が出來た。古いものは役に立たなかつた。無智は不正直と向き合ひ、總ての農業組織は泥土の上にあるやうにぐらつき、たゞ一つの大きい言葉「自由」のみが神の息のやうに水の上に漂つてゐた。何よりも必要なのは忍耐と云ふことであつたが、それも受動的の忍耐でなく、自動的の執着の強い、時には策略と細工もやらねばならぬ忍耐であつた。……ところ

がこれがリトウイノフの様な性質の男はなか／＼難かしかつた。彼には最う生きたいと云ふ欲望も餘り無かつた。……だのに何うして働いたり骨を折つたりする氣になれよう？

けれども一年たち、二年たち、今は早や三年目が遣つて來た。彼の大きい志も段々實現され、肉となり血となり、蒔かれた種は芽を吹いて、最う何んな公然の敵でも内密の敵でも其れを踏み潰すことは出來なくなつた。リトウイノフは土地の大部分を半分配の制度で即ち憐れな原始的の制度で百姓に任せてゐたのだが、それでも何事かは成しとげたので、工場を回復したり、自由に雇つた五六人の労働者で小さい農場を作つたり、——時々雇つたのを寄せれば五十人は充分使つた——それから借金の大部分も拂つたりした。……彼の精神も元氣になつた。昔のリトウイノフの様になつた。尤も胸の奥深く巢喰つた憂鬱はなか／＼去らないで、彼が年の割合に物靜かに見えたのは事實である。交際も狭い範圍内に閉籠つて、昔の人たちとも關係を絶つてしまつた……けれども其の死んだ様な無頓着の時は過ぎて、彼も生きた人に混り、生きた人の様に振舞ふ時がまた來たのだ。曾て彼を取まいた喜びの記憶も消えて、バーデンであつたことは夢の様に幽かになつた……そしてイリーナ？ 彼女でさへ薄く消えてしまつて、たゞ彼女の面影を次第に包む霧の蔭に何だか危険なものがあるやうな氣が幽かにするだけだつた。タチアーナの噂は度々聞いた。何でもタチアーナは百六十哩離れた彼女の故郷で伯母と

一緒に餘り外にも出ず、餘り客も來ない、靜かな——けれども幸福な楽しい——生活をしてゐるさうな。五月の或る晴れた日の事だつた。彼が自分の書齋で最近のペテルブルグの新聞を頻りにはぐつてゐると召使が來て年の寄つた伯父が來たと告げた。この伯父と云ふのはカピトリーナ・マルコウナに取つては従兄弟に當る人で、今まで彼女の家に逗留してゐたのだが。今度リトウイノフの近くの土地を買つたものだから、其處まで出かける序に此處に寄つたのである。彼は二十四時間を甥と共に過ごしながら、いろ／＼タチアーナの様子を語つて聞かせた。其の翌日、彼が立去つた後で、リトウイノフは別れて以來初めて彼女に手紙を出した。彼は其の手紙でせめて手紙の往復だけでいゝから元の交際をしてくれと頼み、また二人は永久に逢ふ望みを棄て、しまはなければならぬかどうか知らしめてくれと頼んだ。彼は多少胸をときめかせながら返事を待つた……聽て其の返事が來た。タチアーナは彼の申込みに懇ろに答へた。そして「若し遊びにゐらつしやるならお待ち申してゐます。病人でも別れてゐるより一緒にゐた方が樂なもの、」と云ふ謬もありますから、」と手紙を結んであつた。カピトリーナ・マルコウナも宜しくと書いてあつた。リトウイノフは子供の様に悦こんだ。物事に斯んなに悦んで胸を轟かせるといふことはリトウイノフに取つては久しぶりのことであつた。彼は急に嬉しく氣が輕くなるやうな氣がした……丁度太陽が昇つて夜の闇を追拂ふ時に、日光と共に軽い微風が復活の大

地の上を遊び戯れる時のやうな気がした。リトウイノフは其の日にこくしてゐた。農園に出て指圖をする時でさへにこくしてゐた。彼は直ぐ旅行の用意に取掛つて、二週間の後には早やタチアーナの家に向つて旅をしてゐた。

二十八

彼は大した冒険もなしに悪い路を靜かに馬車で走つた。たゞ一度後ろの車のタイヤが毀れたので鍛冶屋が鎚を持つて直さうとしたのだが、よく分らないのでタイヤと自分と兩方とも罵りながら、とうとう仕事を投げてしまつた。けれども幸ひな事には我が國では、特に軽らかり泥地ではタイヤが毀れたまゝでも立派に旅が出来る。また一方ではリトウイノフはちよつと珍らしい人に出會した。ある處で彼は行者達が腰かけてゐるのに出會したが其頭に座つてゐるのがピシユチャルキンで、其の言葉の賢こさうな點や、地主たちや百姓たちに尊敬されてゐる點などでリトウイノフは彼がまるでソロンカソロンモンのやうな気がした。……其顔附まで何だか昔の聖人の面影があつて、頭の頂邊は禿げ、顔は八釜しい道徳で、嚴肅なジェリーの様になつてゐた。彼はリトウイノフが——「若し大膽に云へば、自分の領地」に遣つて來たことを非常に嬉しく思ふと告げた。そし溢れ出すほどの善良な思ひに堪らな

い様な風をしてゐた。それでも彼は一つの噂を聞かして呉れたが、其の噂はウオロシロフとあの金の名札の勇者がまた軍籍に身を投じたことと云ふことで、何でも自分の聯隊の將校たちに佛教だつたか物力論だつたか、兎に角そんなもの（ピシユチャルキンはすつかり忘れてゐる）の講議をしたことがあるさうな。其の次の驛で、リトウイノフの馬の用意もまだ出来ない明け方早く、彼がまだ馬車の中でうとくしてゐると、何だか聞き覚えのある聲がする。眼を開けると……驚いた！ 灰色の寛調衣を着て、だぶくのズボンを着いて、驛小屋の入口に立つてゐるのはグバリヨーフではないか？……と思つたの一瞬の間で、次の瞬間にはグバリヨーフでない事が解つた……だが何と云ふ方だらう！……たゞこの男はグバリヨーフよりもつと口や齒が大きく、懶さうな眼の表情もつと荒々しく、鼻も不格好で髭の多く、全體の調子が重々しくて憎らしかつた。

「馬鹿——野郎、馬鹿——野郎！」と其の男が狼の様な口を開けてゆつくり毒々しく奴鳴つた。「間拔け奴……口ぢや、自由かどと云ひながら……馬さへ、拵へることが出来ないんだらう……馬鹿……野郎！」

「馬鹿……野郎、馬鹿……野郎！」と他の聲が小屋の内から聞こえたと思ふと同時に矢張り灰色の寛調衣にだぶくのズボン穿いた、本物の、間違ひのないグバリヨーフ其の人、ステパン・ニコラエ

ウイツチ・グバリョーフが入口に現れた。そして彼も兄の眞似をして、「間抜け奴！」と云つた。(最初の紳士は彼の兄で昔風な腕力で有名な人で自分の領地を處致してゐた)「撲つてやるにかぎるんだ、鼻面を一つ二つ撲つてやるにかぎるんだ、彼奴等の自由はそんなもんだ、自治が、ふん……今に思ひ知らしてやる……だがムッシュー・ロストンは、何うしたんだらう？……何を思案してゐるんだらう？……己れたちに面倒かけさせない様にするのが……あの怠け者の役目なんだが。」

「だからさ、彼奴は怠け者だと己れが何時も云つてゐるぢやないか、駄目な奴だ！ 然し昔のよしみだから仕方もない譯だ……ムツシュユー・ロストン、ムツシュユー・ロストン！……何處にゐるんだ？」と足のグバリョーフが云つた。

「ロストン！ ロストン！」と弟のグバリョーフが奴鳴つた、「大きい聲で呼ばなくちや、ドリメドント・ニコライツチー！」

「呼んでゐるぢやないか、ムツシュユー・ロストン！」

「はい、はい！」と急がしさうに返事をしながら小屋の陰からバムバエフが飛び出した。

リトウイノフは息がつまるほど吃驚した。この運の悪い熱情家は眩に穴のあいた見すばらしい組紐の上衣をだらりと着込んで、顔は餘り變つてもゐないが何處なく撃め面になり、おど／＼した小さい

兩眼には人の鼻息ばかり伺つて、媚びてゐるやうな臆病な卑しい色が見えた。尤も染めた頬髭だけは厚い唇の傍に昔の通り生えてゐた。二人の兄弟が一緒になつて入口の階段の上から叱ると、彼は其の下の泥の中に突立つて悄然と上體を前に屈めて、指先で頻りに帽子をもじ／＼つき、機嫌を取る様に神經質的の微笑を見せながら馬が直ぐ来る旨を答へた……兄弟はそれでもなか／＼承知しなかつたが不圖弟のグバリョーフがリトウイノフに眼を注いだ。リトウイノフだと知つたのか、それとも見知らぬ人に恥じたのか、兎に角彼は急に熊の様に向き直つて鬚を嚙みながら小屋の内に姿を隠した。すると兄の方も口をつむいで同じ様に熊の様に向き直つて弟の後に従つた。あの偉大なグバリョーフは自分の國でも勢力を失はないでゐるとみえる。

バンバエフも靜かに二人の後を追はうとした……リトウイノフは彼の名を呼んだ。彼はぎろ／＼周圍を見廻してゐたが顔を上げてリトウイノフを認めるや否や兩手を擴げて馬車に飛び寄り、馬車の扉に縋りつきながら烈しく、しやくりあげて泣き出した。

リトウイノフは彼の方にのしか／＼つて肩を叩いてやりながら、「おい、おい、バンバエフ、」と呼んだ。彼は泣きながら、「ねえ、君……ねえ、君……どんなに……」と切れ／＼と呟いた。

「バムバエフ！」と小屋の内から兄弟の聲が奴鳴る。

バムバエフは顔を上げていそ／＼と涙を拭いて、

「ぢや君……ぢや君、左様なら……あんなに呼んでゐるから。」

「しかし何うして君、こんな處に來たんだ？ 一體何をしてゐるんだ？ 僕は佛蘭西人を呼んでゐるのかと思つてゐた……」

「僕はその人たちの……執事をしてゐるんだよ、」と云ひながらバムバエフは小屋の方を指差した、「そして冗談に佛蘭西人になつてゐるんだ。僕に何が出来るものか？ 然し何も食へないだらう、それにお金も無くしてしまつたものだから、とう／＼斯んなに鞭の中に頭を突込まなくちやならなくなつたのだ。あまり自慢も出来ないわけさ。」

「しかしグバリヨーフは長く露西亞にゐるのか？ 何うして仲間の人たちと別れたんだ？」

「なあに、皆んな暇が出てしまつたんだよ。……つまり風の向きが變つたんだね……、マトローナ・セミオノーウナのスハンチコフ夫人ね、あの人なんかまるで蹴り出されてしまつたんだ。そして口惜しまぎれに葡萄牙に行つた。」

「葡萄牙に？ 飛んでもない！」

「あゝ、君、マトローナと二人連れで葡萄牙に行つた。」

「誰を連れて？」

「マトローナだよ。あの女の黨派の者のことをマトローナと云ふんだ。」

「マトローナ・セミオノーウナが、自分の黨派を持つてゐるのか？ で其の黨派の人は澤山あるのか？」

「なあに、二人だけだよ。あの人はそれから直ぐ六ヶ月前に此處に歸つたのだが、他の者は皆困つてゐる、然しあの人だけは無事だ。そして兄と一緒に故郷にゐるのだが、君も今ちよつと逢つて……」

「バムバエフ！」

「はい、ステパン・ニコラエウイチ、たゞ今。君は何うやら景氣がよささうだね！ まあ有難いことだ！ これから何處に行くんだ？……まづたく思ひがけがなかつたねえ……君、バーデンを覚えてゐるか？ あゝ、彼處は實際いゝ處だねえ！ 時に君、ビンダソフを覚えてゐるか？ あの男は死んだんだよ。あれから收税官になつてね、酒場で喧嘩をして玉突の竿で頭を打割られたんだ。本當に不景氣な時代になつたもんだね！ けれどもまだ僕は思ふね、露西亞……あゝ、我が露西亞？ まあ、あの二匹の鷺鳥を見たまへ、歐羅巴中探したつてあんなのは無いぜ！ 純粹ーアルザマス産だ！」

バムバエフはこの押さへ難い熱情の言葉を捨科白してあたふたと驛小屋に駆け込んだ。其處からは

また口穢なく彼の名を罵る聲が頻りに聞こえて来た。

其の日が暮れる頃にはリトウイノフもタチアーナの村近く差懸つてゐた。小川の上の勾配の、近頃植えたらしい庭木の真ん中に會つて彼の許嫁だつた女が住んでゐる家が立つてゐた。家も近頃建て直したものとみえて、川を距つた野原の遠方の方からよく見えた。リトウイノフは、其の家の尖つた破風や、列を作つた小さい窓が夕日に赤く輝いてゐるのを、遙か一哩半も遠くから見ることが出来た。彼は最後の驛を立つた時から何となく胸騒ぎを感じてゐたが、それが今は最う戦慄……怖れをも混へない、幸福の戦慄になつてしまつた。「二人は何んなに己れを迎へてくれるだらう？　こちらは何んな挨拶をしたらいゝかしら？」と彼は頻りに考へるのであつた。……考へを扮らすために彼は白髪の岩丈な馱者に話しかけたが、この男は僅かに十哩を二十五哩の勘定にしてしまつた男なのだ。リトウイノフはこの男にシエストフの家の人を知つてゐるかと思つてみた。

「シエストフの家の人？　知つてますとも！　二人とも親切な人ですよ、全く親切な人ですよ！　病氣まで直して下さいますからね。嘘ぢやないんですよ。全くお医者様なんですよ！　皆んなが直して貰ひに行きますよ。さうですとも。皆んなが押しかけるやうにして行くんです。誰でも若し病氣になつたり傷をしたりしますとね、直ぐあすこに押しかけるですよ、さうすると粉薬なり、塗薬なり、

洗薬なり下さつてそれで、綺麗に直つてしまいますよ。ですが何分金の爲にやつてゐるのぢやないと仰つしやるのでね、皆んなお禮に困るんですよ。學校もお建てになりました……然しこりや馬鹿げたことではあゝ！」

馱者の話には耳を傾けつゝ、リトウイノフはその家から眼を離さなかつた……白い着物の女が露臺に現れてちよつと立つてゐたかと思ふとまた姿を隠した……「タチアーナではないか？」胸の中で心が踊りだした。「早く、早く！」と彼がせがめば馱者も馬を急がせた。それから二三分たつた……馬車が開いた門を這入る……すると入口の石段の上に立つたカピトリナ・マルコウナは狂喜のやうになつて手を叩き、「ほら！　妾が先きに聞きつけた、妾が先きに見つけた！　あの人だ……！　……最う解つた！」

召使が走り寄つて馬車の扉を開けようとするのも待たないで、リトウイノフは逸早く飛降りて、カピトリナ・マルコウナを抱き締め、それから、家の内に這入つてまで駆るやうに廣間から食堂へ行つた……彼の前には含羞みながらタチアーナが立つてゐるではないか。彼女は優しい愛撫する様な眼差で男を見て（少し腹せてはゐるが其の方が却つてよく似合つた男の方に手を差出した。けれども彼は其の手を握らないで突然彼女の前に跪いた。餘り思ひ懸けないので女は何う云つていゝのか、何うして

いゝのかさつぱり解らなかつた。……彼女の眼から、涙がはら／＼とこぼれた。彼女は驚きもしたが其の顔は喜悅に輝いてゐた……「グリゴリー・ミハリツチ、何うなさつたの、グリゴリー・ミハリツチ？」と女が云つた……其の間にも彼は女の着物の端を接吻してゐた……彼は優しい感情の渦巻きの中でバーデンでも丁度今と同じ様に此の女の前に跪いたことを思ひ出した……だがあの時と……今！

「タチアーナ！ タチアーナ！ 許して呉れますか、タチアーナ！」と彼が云つた？

「伯母様、伯母様、何うしたんでせう？」とタチアーナは、後から這入つて來たカピトリーナ・マルコウナを振返つて云つた。

「いゝぢやないか、タチアーナ、罪人は悔い改めたのだ。」とこの親切な老婦人が答へた。

けれども最う話を結ばなければならぬ、また話すべき事も最うないのだ。後は讀者が勝手に想像出來ることと思ふ……だがイリーナは何うしたらう？

イリーナは最う三十になるのだが相變らず美しく、澤山の若い男たちに愛されてゐる。また一層澤山の男たちに愛せられるだらう若し……若し……

讀者よ、諸君は此處で暫らくの間ベテルブルグ第一流の或る家庭を覗いてみようとは思はないか？

まあ諸君の眼の前に廣大な室があると思ひたまへ、整潔に——とは云はぬ、それは餘りに卑しい形容だ、壯麗に、華やかに、眼も眩むばかりに、裝飾された室があると思ひたまへ。諸君は自然に頭が下がる様な心持を知つてゐるか？ 非常に高い禮儀とか最も高尚な慈善とか、早やく云へば詰り此の世のものでない或る物に捧げられた殿堂に這入つた時の心持を知つてゐるのか？……一種の神秘的な、本當に神秘的な靜寂が諸君を包む時の心持だ。扉にも天鵞絨、窓にも天鵞絨が懸かつてゐて、床にはふわ／＼として海綿の様なラグを敷きつめて、總ての者が粗野な物音や、烈しい感覺を柔らげる様に出來てゐる。ランプはよく整頓した情緒を起こさせる様に盲く懸けられてゐて、閉じ込めた空中には穏やかな香が漂ひ、卓子の上の沸湯器でさへ、しんみり落着いた音を立ててゐる。此の家の主婦でもありベテルブルグの社交界の花形の一人でもある婦人は部屋の内死にかけた病人でもある様な聞こえるか聞えないかの小さい聲でひそ／＼と話をする。だから他の婦人たちもそれにならつて小聲で囁く。主婦の姉妹は茶を注ぎながら何やら頻りに囁いてゐるのだが、何かの拍子で此の家に來會はせて彼女の前に座つてゐる若い男は、彼女が何を要求してゐるのかさつぱり解らない。ところが彼女の方では六遍も繰返して、「Vous avez une tasse de thé？」と訊ねてゐるのだ。隅の方には若い様子のいゝ人たちが控えてゐる。其の人たちは愛嬌のいゝ、優しく人の機嫌を取る様な眼差をしてゐて、顔附にも何

處かつ、まじやかな落着いた追従の色が現れてゐて、胸には星や十字の勳章が穏やかな光をはなつてゐる、取り交される會話は品のいゝ話ばかりである。宗教のこと、愛國のこと、「神秘の滴」のこと、グリーンカのこと、東部に於ける傳導や白露西亞に於ける修道院や講中のことなどが話された。時々軟らかい絨氈の上を音もなく立てないで制服の給仕が靜かに歩くのだが、其の、ぎつちり密着いた絹靴下の中で腓が歩く毎に音もなく揺れる。其の固い筋肉の禮儀正しい動きは、端正な、嚴肅な、神聖な一般の印象を増々深くするばかりであつた。

殿堂だ、まるで殿堂だ！

「今日ラトミロフ夫人にお逢になりましたか？」と或る貴婦人が靜かに訊ねた。

「え、リースさんのお宅でお目に懸りましたがね、ほんとにお氣の毒な方ですわ……あの方は……皮肉な方で……elle n'a pas la foi」と女主人が答へた。

「さうねえ」と婦人も調子を合はして、「ピオートル・イワニツチも云つてゐましたが本當ですわ、あの方は……あの方は皮肉な人です、」

「Elle n'a pa la foi」と云ふ聲が香の煙の様に女主人の口から出た、——「C'est une âme égaree. 皮肉な人ですよ。」

2,300 — 6,300 大肉の事

そしてこれが若い人たちが誰も彼も残らずはイリーナを愛さない理由なのである。彼等はイリーナを怖れてゐるのだ……彼女の「皮肉な理智」を怖れてゐるのだ。これは近頃の彼女を評した言葉であるが、大抵の言葉に眞理が含まれてると同じく、この言葉にも眞理の一粒は含まれてゐるのだ。彼女は若い男たらに怖れてゐるのみでなく、相當の年輩の男にも、位置の高い人にも、最高の位置の人にも怖れられてゐる。彼女ほど人の性格の可笑しい憐れな方面を旨く巧みに臭ぎ出して、忘れないほどの無慈悲な言葉で踏み躪り得る者はないのだ……其の言葉の刺は甘い薫のある美しい唇から出るので一層鋭さが増すのだ……そして心では何んな事を考へてゐるのかさつぱり解らないのだ。然し彼女の崇拜者たちの間では本當に彼女に愛されてゐる者は無いと云ふ噂が信じられてゐる。

佛蘭西人の謂ふ出世の道をイリーナの良夫は目覺しく進んだ。肥大將軍は彼よりも上に昇つたが、謙遜家の將軍は後になつてしまつた。

イリーナが佳む其の同じ町に例のソゾント・ハツギンも住んでゐるのだが、二人が逢ふことは滅多になく、また女の方でも彼に逢ふ必要がないのだ……彼に預けてあつた女の子は最近死んでしまつたのだもの。

——(終了)——

大正十一年三月十五日印刷
大正十一年三月二十日發行

煙

定價壹圓三拾錢

不許
複製

發行所	印刷所	印刷者	編輯兼發行人	譯者
東京市日本橋區 本銀町二ノ八番地	東京市小石川區西古川町二十五番地	鈴木木角	鷺尾浩	妹尾紹夫
冬 電話本局三一〇二番 振替東京四五四六番	夏 東山堂印刷所			

K 417

506
50

終